



公益社団法人日本環境教育フォーラム

清里ミーティング2017(通算31回目)

「組織・活動を変革する17の視点～SDGsでつくる私のアクション」

報告書

日 時：2017年11月18日(土)～20日(月)

会 場：公益財団法人キープ協会清泉寮

山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

主 催：公益社団法人日本環境教育フォーラム

後 援：環境省、文部科学省、林野庁、山梨県、

日本環境教育学会、持続可能な開発のための教育推進会議、

協 賛：アサヒグループホールディングス株式会社

公益財団法人セディア財団

損害保険ジャパン日本興亜株式会社

公益財団法人損保ジャパン日本興亜環境財団

J-POWER(電源開発株式会社)

株式会社日能研

参加者：137名

目 次

開催趣意	1
スケジュール	2
1 日目 開会式・全体会 1	5
1 日目 ポスターセッション	12
2 日目 参加者企画ワークショップ	14
早朝ワークショップ	14
対話型ワークショップ (150 分)	16
体験型・フレッシュパーソンズワークショップ (80 分)	27
2 日目 全体会 2「自分×SDGs で次のアクションを考える」	36
3 日目 当日募集ワークショップ	38
3 日目 全体会 3「全員参加型ディスカッション～SDGs でつくる私のアクション～」	41
3 日目 閉会式	44
オプション	45
参加者データ	46
スタッフ・ボランティア	47
清里ミーティングこれまでの実績	48

清里ミーティングは、1987年9月、自然体験・野外教育・環境教育に関心を寄せる人たちが山梨県清里に集まり「第1回清里フォーラム」を開いたことからスタートし、2016年に通算30回目の開催を迎えた。2017年は11月18日（土）～20日（月）の3日間にわたり、公益財団法人キープ協会清泉寮・山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンターを会場に開催した。

■ 清里ミーティングの目的

このミーティングは、主に以下の3点を全体のテーマとしている。

1. 海外や国内各地で取り組まれている最新の環境教育に関する情報の共有
2. 参加者同士のネットワークの構築
3. それぞれの環境教育活動を理解し、理念や意識の共有

ますます深刻になりつつある環境問題を解決する取組の一環として環境教育がある。環境問題を解決し、住みやすい社会にしていくためには、まず、諸問題を知り、気づき、関心を持ち、問題意識を共有することが大切である。そして、自然はさまざまな分野と密接につながっていることから、それぞれの分野に携わる人と人（または団体）がつながりを持ち、共に手を携えていくことが必要である。

全国各地から研究・教育・行政・企業・NGO・NPOなど環境教育の現場で働く人々同士のつながり（＝ネットワーク）を大切にし、継続的に育んでいくことが社会を動かしていく力の源になると考えている。そのために、お互いの活動を理解し、認め合い、共に考え、力を合わせていける場の基盤づくりを目的として、本ミーティングを開催している。

■ 清里ミーティングの特徴

清里ミーティングの最大の特徴は、参加者が“主役”であること。

どのようなことについて話し合い、共有し合うのか、参加者主体で作り上げていくという性格を持つ。主催側で企画したプログラムのほかに、参加者の中からプログラムを企画・実施する方を募って開催している。

■ 今年の特徴

2017年は「組織・活動を変革する17の視点 ～SDGsでつくる私のアクション～」と題し、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発目標（SDGs）」をキーワードとした。

SDGsの視点から参加者同士が活発に対話することによって、参加者が自身の組織・活動の強みと弱みを把握するとともにSDGsの中で自身の活動がどこに位置しているかを整理し、すでに展開されている活動や組織の在り方をもう一歩進めるヒントを得る3日間となった。

最後は参加者ひとりひとりが次に行いたい「私のアクション」を宣言し、通算31回目の清里ミーティングは終了した。

1 日目 11 月 18 日(土)

時間	内容	会場
10:30～	受付開始	新館フロント前
11:00～11:30	ちょっと早めに到着された方のための先取り交流企画 (自由参加)	新館フロント前
13:00～13:30	開会式	新館ホール
13:30～15:05	●全体会1「SDGs に向けて教育は何ができるか」 ファシリテーター: 高野 孝子氏 (ECOPLUS/JEEF 理事) スピーカー: 長沢 恵美子氏 ((一社)日本経済団体連合会) 藤本 亜子氏 ((一社)環境パートナーシップ会議) 高木 幹夫氏 (日能研/JEEF 理事)	新館ホール
15:05～16:45	休憩・チェックイン	
16:45～18:00	ポスターセッション	新館ホール
18:00～20:40	夕食	新館レストラン
20:40～	情報交換会: ●「人と組織の紹介処(コンシェルジュデスク)」開設 ●「環境教育リクルート」コーナー開設 ● GEMS 屋台・体験ワークショップコーナー開設	新館ホール

2 日目 11 月 19 日(日)

時間	内容	会場
7:00～8:00	早朝ワークショップ (自由参加)	
	1 森林療法プログラム体験～樹林気功とグラウンディング	本館ロータリー
	2 ヨーガと瞑想	本館ホール
	3 甲虫の玉虫でアクセサリを製作してみよう	アンデレホール
	4 マインドフルな自然体験	新館ホール
	5 冬鳥と出会い、地球を感じよう	本館ロータリー
7:30～9:00	朝食	新館レストラン
9:00～11:30	対話型ワークショップ／特別実施ワークショップ	
	① フライング・ワイルドの体験と SDGs との繋がり	アカマツキャビン
	② SDGs × わたし	C1
	③ 協同学習の手法で環境教育をスキルアップしよう!	本館ホール
	④ 環境思想を考える	ライブラリー
	⑤ 生きものの魅力で心を動かしたい	アンデレホール
	⑥ 森林療法 × 環境教育～癒しが持つ SDGs への可能性	カラマツキャビン
	⑦ つなげよう! 自然体験型エコツアーと SDGs	ハンターホール

	⑧ CSR プログラム事例で学ぶ社会的インパクト評価	特別展示ホール
	⑨ パートナーシップでつくる「キヨサト」SDGs 企画	C2
	⑩ 環境教育研究 & 実践から考える SDGs	新館ホール
	⑳ 音楽フェス × 環境教育 @ 清里 超実践体感ワークショップ	C3
11:30～12:50	休憩・昼食・移動	
12:50～14:10	フレッシュパーソンズ(以下:F)・体験型(以下:E)ワークショップ ①	
	⑪ F: 持続可能な「ミライ」をつくる人材育成の在り方	アンデレホール
	⑫ F: 森林療法～調和する自己の持続可能性	カラマツキャビン
	⑭ E: 火を囲み、みんなで作る「居場所」づくり	アカマツキャビン
	⑮ E: KP 法で SDGs を整理してみよう	本館ホール
	⑯ E: 17 の SDGs で柔軟な頭を作るゲームを	特別展示ホール
	⑰ E: アナログゲームで環境を学ぼう!	ハンターホール
	⑱ E: 「教える」より「学びあう場」を創ろう!	新館ホール
14:10～14:40	休憩・移動	
14:40～16:00	フレッシュパーソンズ(以下:F)・体験型(以下:E)ワークショップ ②	
	㉔ F: 「うんこ」から自然を見る ～教材化の面白さと可能性	カラマツキャビン
	㉖ E: 自然をフィールドとした父親参加型のわんぱく子育て	特別展示ホール
	㉗ E: 既存のプログラムを SDGs ナイズ大作戦! GEMS 編	アカマツキャビン
	㉘ E: SDGs と森里川海、そしてライフスタイル	本館ホール
	㉙ E: 目からウロコ、環境教育のためのミニマム天文基礎講座	新館ホール
	㉚ E: 公害と SDGs JEEF・あおぞら財団の協働 FW	ハンターホール
	㉛ E: 一体感を生み出す魔法の技術! アイスブレイク三連発♪	アンデレホール
16:00～16:30	休憩・移動	
16:30～18:00	●全体会2「自分×SDGs で次のアクションを考える」 自分がすでに関わっている、又はこれから始めようと思っている活動を SDGs の枠組みで捉え直し、今できていることとこれから加えていくことを 明確にします。	新館ホール
18:00～18:15	このあとのご案内・夕食準備	
18:15～20:40	夕食	新館レストラン
19:00	★3 日目の「当日募集ワークショップ」実施者エントリーの締め切り	
20:40～	情報交換会 ● 「人と組織の紹介処(コンシェルジュデスク)」開設 21:00 頃から雇い手と働きたい人のマッチングタイム ● 「環境教育リクルート」コーナー開設 ● GEMS 屋台・体験ワークショップコーナー開設	新館ホール
21:30	★3 日目の「当日募集ワークショップ」参加者エントリーの締め切り	

3日目 11月20日(月)

時間	内容	会場
7:30～9:00	朝食	新館レストラン
7:30～9:00	チェックアウト	
9:00～10:30	当日募集ワークショップ	
	① GO OUT JAMBOREE ZO18 キッズフィールド作戦会議	ハンターホール
	② オイシータノシーサワガシー焚火を囲む会	アンデレホール
	③ 環境教育カードゲームを開発	特別展示ホール
	④ KP 法のいろいろな使い方	ライブラリー
	⑤ AIやシェアリングビジネスの時代の自然学校環境教育って？	本館ホール
	⑥ 若者と一緒に考えるこれからの環境教育	C1
	⑦ 倒れる前に生き方をふりかえろう！ ～今ここを幸せに生きる技 マインドフルネス入門～	新館ホール
10:30～11:00	移動	
11:00～12:00	●全体会3「全員参加型ディスカッション ～SDGs でつくる私のアクション～」	新館ホール
12:00～12:30	閉会式	
12:30～14:00	さよならパーティ(立食)	新館レストラン
14:00～15:00	オプション企画 会場であるキープ協会の歴史や環境に対する取り組みを紹介する ツアーを行います。(事前申込み不要。期間中に参加募集します) ① 清泉寮ペレットボイラー見学ツアー ② 聖ヨハネ保育園見学ツアー	各会場

1 日目 開会式・全体会 1

※敬称略

開会式

司 会	： 公益社団法人日本環境教育フォーラム（JEEF）	事業部	垂水恵美子
主催者挨拶	： 公益社団法人日本環境教育フォーラム（JEEF）	会長	岡田 康彦
来賓 挨拶	： 環境省総合環境政策統括官		中井 徳太郎

全体会 1「SDGs に向けて教育は何ができるか」

ファシリテーター：

ECOPLUS／公益社団法人日本環境教育フォーラム（JEEF）理事	高野 孝子
-----------------------------------	-------

スピーカー：

一般社団法人日本経済団体連合会	長沢 恵美子
一般社団法人環境パートナーシップ会議	藤本 亜子
株式会社日能研／公益社団法人日本環境教育フォーラム（JEEF）理事	高木 幹夫



全体会1は、経済・行政・教育の各視点からゲストを招き、各15分、SDGsの現状と事例についての最新情報を参加者に共有いただいた。

その話をもとに、スピーカーによるフリートーク。参加者からの質問や意見も受けながら、会場を巻き込んだディスカッションとなった。

SDGsの理解を深めるための教育は、これから公教育にも採用される見込みがあり、そこに自然学校や環境教育実践者の活躍が広がるチャンスがあると考えられる。私たち環境教育の実践者ができることは何か、次世代を担う子どもたちに何を残してあげられるか、参加者とともに考える時間となった。



経団連が制定している「企業行動憲章」が2017年11月8日に改定された（詳しくは経団連ホームページ）。2010年の前回改定以降、ビジネスと人権に関する指導原則（2011年）、パリ協定（2015年）、SDGs（2015年）が国際的に採択されており、社会的課題解決のために企業のアクション、創造性とイノベーションの発揮が期待されている。

企業トップのSDGsへの理解が深まったのは、経済成長に関する目標が含まれたから。自分たち（企業）のイノベーションの力を、環境を保護しながら、社会的な包摂の実現や社会的課題の解決に役立てることができる。そこに、俄然、関心が高まったのだと思う。そこで経団連が提唱したのが「Society 5.0 for SDGs」。

Society 5.0とは、狩猟社会、農耕社会、工業社会、情報社会に続く、人類社会発展の歴史における5番目の超スマート社会。ビッグデータや革新技术を利用することで様々な制約を乗り越え、一人一人の生活がより快適になるにはどうしたらよいか。これらをSDGsと各目標をタグ付けして整理している。たとえばIoTやAI、ビッグデータを活用したスマート農業によって食糧生産を増大させる取り組みは、SDGsの2番目の目標「飢餓をなくそう」に対応している。

日本の企業はまだ始まったばかりだが、7月に国連で開かれたSDGsの会合「ハイレベル政治フォーラム」のビジネス会合に参加したところ、ダノンやタタなどの先進企業はSDGsを経営戦略に位置づけ多大な研究開発投資をして取り組んでいることがわかった。一方、多くの企業は、我が社はSDGsにどう貢献できるか、あるいはしてきたかをSDGsの各目標にタグ付けする「マッピング」に留まっている。今後、SDGsを起点に新しいものを生み出していくには課題があると思っている。働く人々の「生活実感」、「課題発見力（社会的課題が発生している現場に関する知見）」、「多様な人々、組織との協働力」である。特に課題発見力を強化する必要がある。企業の中間管理職などに対する研修を通じて、多様な人と一緒に働いた経験が少なく、コラボレーションするとはどんなことか、実感としてわからない人たちがとても多い印象を受けた。

これらの課題克服のために必要なことは、大きく2つあると思っている。一つは異なる組織と協働することによって社会的感度を磨いていくこと。もう一つは、従業員が「持続可能性」とは何かを学ぶための機会を作ること。このESD（持続可能な開発のための教育）は、企業の中でも求められるのではないかと考えている。

※あくまでも個人の見解です。



私たちの住む地域には、動物園や博物館、環境学習センター、ビジターセンター等、様々な社会教育施設や、市民公園や商店等、生活に密着した場所がある。このような施設や場を、「持続可能な地域を担い・創るための学びの場」にした事例を紹介する。H28年度から始まった、環境省事業で実施された取り組みである。

1つ目の事例は、栃木県内の動物園・水族館。県内で、外来生物ウチダザリガニが見つかり、行政調査により10年以上前に移入している可能性が示唆された。環境教育に関わる多様な



方々の議論で、「青く巨大で目立つウチダザリガニに、なぜ今まで気づかなかった?」、「昔に比べ住民の自然環境への興味が低下していることも一因ではないか」という意見が交わされた。そこで、環境教育を担う県内の動物園、水族館、自然学校を「学びの場」とし、行政の環境部局とパートナーシップを組むことで、外来生物を含む地域の自然環境を体験から学ぶ、専門性の高いプログラムを開発、実施している。

2つ目の事例は、宮崎県日南市の子育て支援センター。地場産業である林業の衰退が課題である日南市は、「木育」を通じて、地場産業の活性化を試みていた。そこで、行政、モノづくり企業、林業組合、高校がパートナーシップを組み、高校生が考える「杉を使った赤ちゃんのおもちゃ」のデザインコンテストを開催。優勝したデザインは企業が商品化し、子育て支援センターで実際に使用される。高校生の地場産業への理解を高め、地域愛を育むと同時に、高校生がアイデアを形にしていく次世代育成の場となっている。

3つ目の事例は、静岡県長泉町の小水力発電所。普段は事業者が売電して利益を得ているが、災害時には、地域の非常用電源として活用できる。しかし、地元での認知度は低かった。地域の防災力を高める手段として発電所が活用されるように、事業者と地球温暖化防止活動推進センター、高等専門学校がパートナーシップを組み、「発電所の防災時の仕組み」と「地域の水資源」を題材にパネルを作成し、発電所の前に設置した。パネルは、学校の副教材としても活用され、発電所が「地域防災」と「水資源」の学びの場となっている。

4つ目の事例は、流域。岐阜県と三重県にまたがる揖斐川流域に位置する、複数の社会教育施設がパートナーシップを組み、「流域のつながり」をテーマとして、上流・中流・下流の住民が環境、歴史、産業について語った映像教材を作成した。教材作りを通じて、流域に「地域を見直し、つなぎ直す」機会が創出された。

これら事例に共通していることは、学びの場を企画する側、参加する側の両者が、「地域を持続不可能にする要因」を考え、「地域を持続可能にするための学び」を深めている点。そして、「学びの場づくり」を1つの施設が頑張るのではなく、多様な主体の「協働：パートナーシップ」で取組まれている点である。

グローバルな目標であるSDGsだが、このように地域の課題を「学びの場」を通じて解決しようとする取り組みは、まさにローカルSDGsの達成に貢献しているといえるのではないだろうか。

ご紹介した事例も含め、今後「大人の学びと子どもの学びの連関」を目指して、学校教育との連携を強化しようとしている施設も多い。取り組みを進めていく中で、新しい仲間とつながり、それにより学校連携が叶ったり、取組の可能性や多様性が高まったりしながら、地域にしなやかな「学びの場」が育っていくのだと思う。

「教育」というテーマで話します。長沢さん、藤本さんと違うのは、日能研は学習塾なので「教科」、そして「教材」があること。ところが教科を基にした学びで考えると、SDGsにはつながらない。ただ、「学習」「学び」として考えると、いろいろ見えてくる。

「わたし」はこれまで、さまざまなことを学んできたから今の「わたし」がいる。当たり前といえば当たり前だが、大変なことと思いませんか。人と人が出会ったら、互いに経験してきた「学び」は異なる。日本なら文部科学省という組織があり、学校という場で育っているから、まだいい。しかし世界に出たら？

「学ぶ」とは、変わり続ける力だと思っている。大人になると「あなたの専門は？」と問われる機会が多い。しかしそれは過去のこと。これまで自分が過ごしてきた時間と、これから起こり得る未来をどうつなげていくか。「ESD（持続可能な開発のための教育）の10年」は、動いたような動かないような、分かったような分からないような、大事なものだとは思っているが、違和感があった。たとえば活動報告会。やったことはすごいと思うが、それが何に繋がっていくのか、なかなか未来が見えないことがある。

経団連の長沢さんが話された「生活実感」。私も実感がないと思った。マンションで挨拶すると、三分の一は相手が戸惑う。マンション専用のごみ捨て場はあまりにも分別がされておらず、捨ててに行くのが嫌になるほど。企業も同じ。「事業計画」から実際にその仕事をする人に話がくると、マンションと地域のごみの分別が違うように、異なる「分別」になってしまう。

地域には、「リアル地域」と「バーチャル地域」があると思っている。高野さん（ファシリテーター）のところは、住人同士が一緒にごみを捨てに行ったり、どぶ掃除をしたり、草むしりをしたり、「リアル地域」がある。しかし私の住んでいる地域にはない。町内会に入って広報部長をやり、地域の人とお付き合いはあっても、高野さんのような「リアル地域」は感じられていない。一方で、SNSのような「バーチャル地域」はある。自分の好みの人しかいない、「いいね」がきて当たり前の世界。このバーチャル地域とリアル地域が、どのように繋がっていくのだろうか。

SDGsの本を日能研から2016年8月に出版したところ、予想外に売れて驚いている。小学5年生が読めるように、「読み解くためのヒント」も書き、いろいろなかたちでまとめている。「学ぶ」ために「わたし」はどのようにSDGsに取り組もうか、そうしたら分かりやすいか、考えて書いている。学ぶときに、対象そのものを学ぶのか、対象を使って学ぶのか、対象があるということから学ぶのか、さまざまな学び方がある。これからどうやってSDGsに繋がっていくか。もしくは、SDGsが普及した時に騙されないようにすることも必要だと思う。企業としてシニカルな言い方をすると、SDGsは使いやすい。たとえば株主の説得、企業内派閥を超えた動きなど。子どもたちが科目を超えた学びをしていくのに、SDGsは便利なのかもしれない。そんな視点を持ってみたらどうか。課題は多くの「矛盾」の塊。この矛盾を共有し、解決していく報告会または勉強会が、これから必要ではないかと思っている。

「力」には3つの軸があると日能研のスタッフとよく話をする。「知識」、「技術」、そしてそれを使う「わたし」。清里ミーティングは、「わたし力」の塊のような人たちがこれだけ集まっているので、これから楽しい3日間が過ごせるとワクワクしている。



“創造的破壊”のためのパートナーシップ

長沢 高木さんの話にあった「今の私を作っているのは過去学んできたからだ」は、企業の人たちも同じ。これまでの仕事が自分を作っている、あるいは企業のセクションの仕事を作っていることだと思う。そこを超えて次に何を見つけて何をやるか、どうやったら見つけられるか。言い換えると、創造的破壊はどうやってできるかということ。教育に携わる高木さんに聞いてみたい。

高木 よく言われている「アクティブラーニング※」のかたちになると思う。たとえば清里ミーティング中にやる「えんたくん」。モノが出てくるだけは、関わって（受動的に参加して）いることにはならない。創造的破壊の裏側にあるのは、たとえば思い付き、しょうもないこと、ファンタジーのようなエビデンスがないものが、創造的なものにつながっていくと思うが、つい大人は「それ、何で？」「説明してごらん」と聞いてしまう。それがなくなると、生まれてくるのではないかと思う。

藤本 発想の広がりには、パートナーシップが必要。異なる経験をもつ人、異なる組織との出会いが新しい価値観を生む。一人で考えているとなかなか広がらない。他の人と繋がるというひとつのアクションによって、クリエイティブに広がっていくと思う。

高野 まさにこの場はクリエイティブになれる場だと思う。PKT※でも新たなものが生まれていると思う。会場からも、感想や出た話題をぜひ紹介頂けるといい。



参加者からの質問：言語や障害等で、議論や参加の場に参加できない人たちは拾われるか？

長沢 企業でよく意識されているのが、心のバリアフリーをどうやって進めるか。「ユニバーサルマナー」といわれるもの。誰もが暮らしやすい視点とはどんなものか、取り組む側の視点が大事だと思っている。企業行動憲章の4条にも、「すべての人々の人権を尊重する経営を行う。」と明記されている。

高木 地球上の全員とは、知り合いになれない。自分の手が届く範囲の人を、取り残さないということを全員がやればいい。範囲の中にいるけれど心を閉ざしている、手が届かない人もいる。その人がなぜそうなってしまったのか、理解し合えると変わるかもしれない。人間はそれぞれ違いがあるから、みんなが特別になる。その意識を持ったら、「取り残さない」という言葉も変わってくるのでは。

藤本 まずは「参加出来ていないステークホルダーがいる」ことを忘れてはいけない。日本には障害のある子とそうでない子が別のクラスになることもあるが、インクルージョン教育では、障害のある子も、同世代の障害を持たない仲間たちと隣同士で学習する。切り離すことで出来あがってしまう「わからない」が更に壁をつくる。

参加者からの質問：SDGsをテーマにしたツアーを企画。日常に持ち帰る方法、考え方、工夫している点は？

藤本 「楽しかった」で終わってしまうことはESDでも課題になりがち。与えられたものではなく、内から出てくる意識変容でなければアクションは続かない。「楽しかった」は重要でもある。帰って家族に話し、「じゃあ家でもやってみよう」となることもある。協力隊でコスタリカから戻った時、自分の生活とコスタリカの課題がどう結びついているかを考えながら帰国した。当事者がどう自分事に出来るかが大切。

高木 今を生きる力を持つこと。昔、旅は学びだったはず。その場所に行かなければ学べないから、旅をする。知ったことを持ち帰るのではなく、そこで成長した自分を持ち帰る、そんな旅がくれたらいい。

長沢 研修担当の頃、旅そのものに学びのプロセスをどう持ち込むかを考えた。自分が日常に戻った時、共感してくれる一緒に旅をした人たちとのネットワークをゆるやかに続けていくことが大事。

参加 エコツアーガイドを経験して一番大切にしているのは、参加者に最後、問いかけて落とし込むこと。アンケートを取ってどれだけ行動変容があったか追跡したことがある。終わった直後は 89%がすぐにでも行動したいと答えるが、3 週間後には 70%に下がる。そこで新たな行動を追加する、手紙を出すなどアプローチをすると、新しい気づきが得られると思う。



高野 本気で何かを提供することは、手間のかかること。ただ、この手間を惜しんでしまうと効果は薄くなる。

高木 皆さんに問いかけたい。体験学習を進めてきて、どうやって日常につなげるかはということともう一つ、それが政治に結びつかないことが惜しいと思っている。ミクロだけで終わってしまい、マクロまでなかなかいかない。このステップをつくっていくにはどうしたらいいだろう。

参加 難しいことをやらなければいけない、と思ってしまうこともある。環境省で行っている「マイ行動宣言」がある。「地元でとれた旬のものを味わう」といった、これだったらできると思うものが行動に結びつく。

高野 どこで配布されている？

参加 イベントに参加したり、講演したところで使ってもらっている。

高野 「マイ〇〇宣言」を独自に作ってみてもいいかもしれない。

参加 リフレクション（内省）の機会をいかにつくっていくかが大事だと思っている。リアルに集まる機会を提供することをしている。ふりかえりがしっかりできて、次の行動がしやすいのでは。

参加者からの質問：SDGs も ESD もアルファベットで分かりにくい。何かいい表現の仕方、言い方はないか。

高木 「ポケモン GO」ご存知かと思う。作ったのはアメリカの会社だが、キャラクターのTシャツに SDGs のマークを入れている。こうやって遊びを通じて浸透していけば、何か変わっていくかもしれない。

長沢 ピコ太郎のおかげで、日本の SDGs の認知度は少し高まったように感じている。ただし調べてみると、企業だと 6 割、一般だと 2%。言葉もちろん大事ではあるが「SDGs」で定着させていくのがいいように思っている。ESD は SDGs が出てきたことによって、「SDGs を行う人材を育てるため」として ESD を推していくといい。包括的な人を育てていくイメージになるので、利用するのがいい。

藤本 「ふりかえれば ESD」という言葉がある。ESD のつもりはなくても、振り返ると、実は ESD だったということがある。特別なプログラムではなく、地域の祭りやイベントが ESD である場合も多く、参加の動機も「面白そうだから参加してみた」など。無意識のうちに ESD である仕掛けができればいい。

高野 SDGs という言葉を知らなくても、より良い明日に向けてみんなでできる、そういう社会をつくることだと思っている。この会を皮切りに、ワークショップや情報交換会で意見をかわし、ご自身のアクションにつなげてほしい。

※アクティブラーニング：学習者が能動的に学ぶことができる授業を行う学習方法。

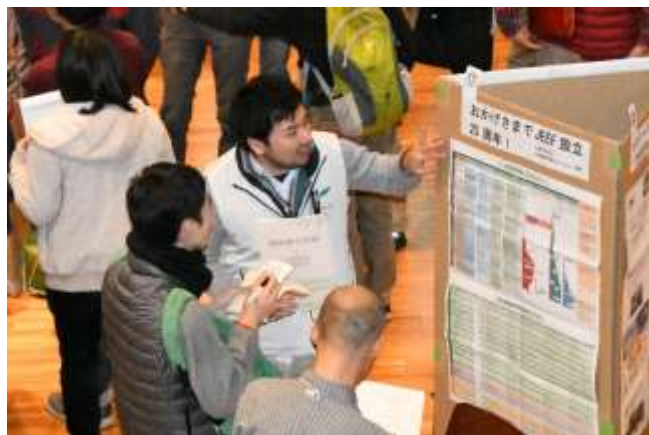
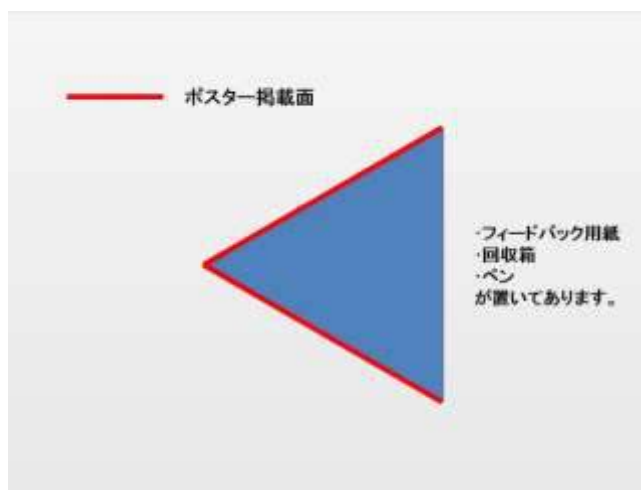
※PKT：ペチャクチャタイム。各登壇者の話題提供の間に、近くの席の人と感想を話す時間。

1 日目 ポスターセッション

参加者がそれぞれ自分の活動について発表し、お互いの活動や目指す方向性について知り合う時間。発表者には A1（縦）× 1 枚分のスペースが割り当てられ、そこへポスターやチラシ等を自由に貼り出し、参加者・参加団体の活動報告や話題提供、PR などを発表した。

発表には 170cm×70cm のダンボール 3 枚で三角柱をつくる「さんかくん」を使い、同時多発的にポスター発表を行った。予め用意したポスターを貼る、KP 法で話をする等、発表者の発表スタイルも自由。時間は区切らず、発表者と聞き手が自由に動き回り、その場で活発な意見交換が行われていた。

また、事前申し込み分だけではなく、発表を行いたくなった人がその場で発表側に回れるよう、白紙の模造紙を貼っただけのスペースを用意したところ、そこで発表者にまわる参加者も見受けられた。



実施者	県名		
飯田 みゆき	東京都	団体名	Natural Bless～森と魂のセラピスト
		タイトル	一般社団法人エディブル・スクールヤード・ジャパン
五十嵐 実	新潟県	団体名	日本自然環境専門学校
		タイトル	日本自然環境専門学校が行なっている事！
猪俣 寛	愛知県	団体名	豊田市自然観察の森
		タイトル	豊田市自然観察の森の環境学習
江利川 法孝	沖縄県	団体名	久志地域交流推進協議会
		タイトル	地域コーディネーターの仕事を通じた地域活性化の取組
大野 さゆり	愛知県	団体名	NPO法人 あそびっこネットワーク
		タイトル	「あそび場」から、地域と社会を変える
小河原 孝生	東京都	団体名	生態計画研究所グループ
		タイトル	生態教育プログラムの展開と施設運営
小野木 幸雄	東京都	団体名	NPO法人海さくら
		タイトル	環境ポータルサイト「BLUESHIP」の活用方法
金沢 信幸	神奈川県	団体名	ESD活動支援センター
		タイトル	全国フォーラム(11月24日・25日@池袋)ご案内
川嶋 直	東京都	団体名	公益社団法人日本環境教育フォーラム
		タイトル	ポスターセッションもKP法でやってみた
河野 宏樹	広島県	団体名	特定非営利活動法人これからの学びネットワーク
		タイトル	体験型の放課後児童クラブ・森のようちえん等の紹介
小林 孝之助	東京都	団体名	アウトドアチャレンジ協議会
		タイトル	野外力検定
齊藤 透	千葉県	団体名	<月>の会・東京
		タイトル	知っているようで実は全くわかっていない『月暦』入門
佐野 由輝	千葉県	団体名	NPO法人イクメンクラブ
		タイトル	自然は僕らの遊び場だ！わんぱく子育て始まるよ
澤田 雄喜	京都府	団体名	公益財団法人京都市環境保全活動推進協会
		タイトル	ボランティアが活躍する環境学習施設
渋谷 晃太郎	岩手県	団体名	岩手県立大学
		タイトル	岩手県滝沢市における市民参加による外来種の分布調査
高島 あずさ	東京都	団体名	東京農工大学
		タイトル	小学校の総合的な学習の時間における森林ESD
加藤 超大	東京都	団体名	公益社団法人日本環境教育フォーラム (JEEF)
		タイトル	おかげさまでJEEF設立25周年！
鳥屋尾 健	山梨県	団体名	公益財団法人キープ協会 環境教育事業部
		タイトル	キープ協会の取り組み
名執 芳博	東京都	団体名	労働金庫連合会
		タイトル	労働金庫連合会×NPOの20年にわたる環境教育
西村 和代	京都府	団体名	一般社団法人エディブル・スクールヤード・ジャパン
		タイトル	学校に食卓を創る教育「エディブル・スクールヤード」
藤木 勇光	埼玉県	団体名	J-POWER&環境政策対話研究所
		タイトル	環境と社会を考える「次世代エネルギーWS」とは
御園生 真美	山梨県	団体名	山梨英和中学校・高等学校
		タイトル	「SDGsを教材とした探究型授業の開発について」
御園生 真美	山梨県	団体名	山梨英和中学校・高等学校
		タイトル	「山梨英和の課題研究における環境教育への取り組み」
湊 秋作	山梨県	団体名	公益財団法人キープ協会 やまねミュージアム
		タイトル	ヤマネからの環境教育・生物多様性教育
村上 友和	神奈川県	団体名	株式会社自然教育研究センター(CES)
		タイトル	フェス×環境教育の実践とこれから
森 雅浩	東京都	団体名	Be-NATURE
		タイトル	幼児自然体験・アウトドアイベント・おとなの自然塾
山田 俊行	岐阜県	団体名	JOLA運営委員会
		タイトル	JOLA2018大賞受賞目指しましょう！
四谷 多弥	栃木県	団体名	NPO法人 那須高原自然学校
		タイトル	那須でやりたいことができる、若者中心に事業拡大中！

2 日目 参加者企画ワークショップ

参加者自身が企画・実施者となるワークショップを開催した。2 日目の早朝に 1 時間、午前に 150 分、午後に 80 分のワークショップ（2 回）を実施。また、実施者でない参加者は自身の興味・目的に合わせて参加プログラムを選択し、各ワークショップ会場で参加者同士の活発な意見交換が行われた。

早朝ワークショップ

1. 森林療法プログラム体験～樹林気功とグラウンディング
2. ヨーガと瞑想
3. 甲虫の玉虫でアクセサリーを製作してみよう
4. マインドフルな自然体験
5. 冬鳥と出会い、地球を感じよう



◆森林療法プログラム体験～樹林気功とグラウンディング

実施者：飯田 みゆき（特定非営利活動法人日本森林療法協会）

気温 0.5 度のなか、参加者はみな興味津々の面持ちで集合した。「五感を開こう！」実施者の言葉に、目を閉じて周囲の囁きに聴き入る。そっと目を開くと、周りの自然が明るく、親しげなものに変わっていた。輪になって思い思いの方向を向き、呼吸に意識を向けて、自分のエネルギーを地球の中心と繋げるイメージを膨らませた（＝グラウンディング）。デッキに着くと太陽が私たちをやさしい光で迎えてくれた。全員から輝くような笑顔と歓声が上がり、一挙にみなとの距離が縮まった。



◆ヨーガと瞑想

実施者：中野 民夫（国立大学法人東京工業大学リベラルアーツ研究教育院）

朝の気持ちのいい時間に、身体を、呼吸を、心を整えるワークショップ。ハンターホールの高い窓から臨む清里の朝の風景を正面に、冷えてしまっている体を各々ストレッチでゆっくりほぐす。スタートは実施者から呼吸法の指導。実施者の声に合わせてポーズを変えながら、硬くなった体を伸ばす。届きたいところに届かない手や足を気にしていると「大事なことは人と自分を比べないこと。自分の身体に耳を傾けて」。自分の内に“気”を向けることができ、とても充実した時間となった。



◆甲虫の玉虫でアクセサリーを製作してみよう

実施者：小林 伊久子（バジリコ（食の研究グループ））

甲虫のヤマトタマムシは、法隆寺宝物「玉虫厨子」に代表されるように、古くから装身具として使われてきた。今回の材料は、盛夏にエノキ、ケヤキなどのニレ科の広葉樹に集まった死骸を実施者が採集したもの。脚や頭など細かい部分にも金属光沢があり、その美しさにはとろける。小さなパーツに四苦八苦しながらペンダント作りに挑戦。そのままの形を活かす人、鋏で切り（思いのほか硬い！）形を変える人などレイアウトによって個性が出て、美しい仕上がりとなった。



◆マインドフルな自然体験

実施者：五十嵐 実（学校法人日本自然環境専門学校）

ペアになり、吸ったり吐いたり同じペースで深呼吸をした。次は呼吸をずらし、一人が吐いた空気をもう一人が吸い込み、浄化して吐き出すイメージで呼吸した。外に出て、気になる木や遠く of 山々など自然物と、吸って吐いてのやり取りしているイメージで行った。

日々あまり意識をしていない呼吸。呼吸に意識を集中することで、いつも何かと考える頭や心を休めることができる。ペアになって呼吸を合わせたり、自然物と呼吸を合わせたり意識を呼吸に集中していると、ゆったりとした気持ちや解放的に変化していること



に気がついた。リラックスできる素敵な時間だった。

◆冬鳥と出会い、地球を感じよう

実施者：安西 英明（公益財団法人日本野鳥の会）

まず、実施者によって野鳥に気づく手がかり、使用する双眼鏡などの説明が行われた。歩き出すと、時折野鳥の群れが飛び立ち、参加者から声があがった。ロシアから飛来したアトリなどの冬鳥、鳥たちを支える生物や自然環境の解説に耳を傾けていた参加者は、知識だけでなく、身振り手振りを交えた実施者の話し方、数々の教材（標本や小道具）にも興味を引かれていた。



対話型ワークショップ（150分）

参加者がそれぞれ企画・実施者となり、参加者同士が刺激を受け合い、意見を出し合い、共に学ぶ場。

本年の清里ミーティングのキーワードである SDGs の達成には、「アドボカシー（問題について知り、解決に向けて声を上げること）」と「プログラム実施（解決に向けた具体的な行動）」が必要であるといわれている。そこで2日目午前の参加者企画ワークショップは、アドボカシーに重点を置き、事例紹介や理想像の創造などを目的としてディスカッション等を行う「対話型ワークショップ」として参加者から実施者を募集し、下記10のワークショップが実施された。

1. フライング・ワイルドの体験と SDGs との繋がり
2. SDGs ×わたし
3. 協同学習の手法で環境教育をスキルアップしよう！
4. 環境思想を考える
5. 生きものの魅力で心を動かしたい
6. 森林療法×環境教育～癒しが持つ SDGs への可能性
7. つなげよう！自然体験型エコツアーと SDGs
8. CSR プログラム事例で学ぶ社会的インパクト評価
9. パートナリシップでつくる「キョサト」SDGs 企画
10. 環境教育研究&実践から考える SDGs

フライング・ワイルドの体験とSDGsとの繋がり

実施者:後藤 清史(野たまご環境教育研究所(野の塾工房たまご))

【概要】

環境教育教材であるプロジェクト・ワイルドに、鳥について扱う「フライング・ワイルド(アメリカ版)」を取り入れた「鳥編」が今年、日本で誕生した。本ワークショップでは、「鳥編」の紹介と共にアクティビティ体験を行い、アクティビティに内包されるSDGsに通ずる部分を確認するとともに、環境教育とSDGsの繋がりを皆で考えた。

【内容】

1) アイスブレイク(自己紹介)

プロジェクト・ワイルドの「第一印象」というアクティビティを取り入れて実施。1枚の紙に、名前・所属、今回のワークショップの参加目的、好きな生き物、苦手な生き物を書き、合図で相手を変える2人組の自己紹介を行った。

2) 「鳥編」の紹介とアクティビティの体験

a カッコウのいたずら(鳥編)

カッコウは他種の鳥の巣に卵を産み、ヒナを育てさせる托卵を行う。托卵がなぜ成立するのかをホオジロの親鳥役、カッコウのヒナ役、ホオジロのヒナ役に分かれて体験した。ヒナ役は、親鳥役が餌をくれるのを待つが、親鳥役は鳴き声と口の開きの大きいヒナに餌を優先的に与えるため、体の大きなカッコウのヒナ役に餌が集中する。このような托卵が成り立つメカニズムを体験によって学んだ。

b 鳥になって飛んでみよう(鳥編)

ペアになり、袋の中から鳥の名前が書いてあるカードを引き、その鳥の羽ばたきをペア毎に体験した(例えばコウノトリは10秒間に2回羽ばたき、カラスは3~4回羽ばたく)。体験時間を十分にとったことで、自分たちの引いた鳥だけでなく、他の鳥の羽ばたきにも興味を持ち、ペア毎にチャレンジする姿が見られた。

c 鳥はなぜ飛べるの(鳥編)

イヌワシがプリントされた紙が配られ、指定された場所を折り紙のように折っていくことで、イヌワシを模した紙飛行機が出来上がった。それぞれのイヌワシを皆で飛ばし、大型鳥類の飛行に思いを馳せた。

d 渡りはつらいよ(水辺編)

従来のプロジェクト・ワイルドから、渡り鳥になって越冬地と繁殖地を行き来する(渡りをする)アクティビティを体

験した。繁殖地と越冬地のエリアには湿地を表したゴムマットが敷かれてあり、そのマットを目指して渡りを繰り返す。冬になり、繁殖地を出発し、越冬地に向かう。そして次のシーズンに繁殖地に帰ってくるが、越冬地に行っている間に埋め立てが行われ、繁殖地の湿地(マット)が使えなくなるといった事が生じる。繁殖地から越冬地に戻るときにも同様のことが起こるなど、湿地の増減による渡り鳥への影響を体験した。渡り鳥が渡るためには、繁殖地か越冬地かどちらかが残っていればよいのではなく、どちらも無ければ成立しないことを体験によって学んだ。また、生物の生態が人の社会活動の影響下に置かれていることを体験した。

3) 環境教育のアクティビティとSDGsとの繋がり

最後は、今まで体験したアクティビティとSDGsの17項の目標との繋がりを話し合い、グループごとに発表を行った。グループによっては17項目全てが鳥の生態を守るために必要という声もあり、どのグループからも生物だけを守るのではなく、それに付随する要因(気候変動やエネルギーなど)を認識し、取り組むことが大切という意見が出た。参加者全員が環境教育とSDGsの繋がりを見出し、各人の活動目的を意識したところでワークショップは終了した。

【まとめ】

鳥にかかわるアクティビティの体験により、鳥の生態について理解を深めるだけでなく、鳥の生態を守るために私たちができる取り組みを考えることで、SDGsについても考える機会となった。SDGsは人が考えたものではなるが、それが人主体だけに留まらず、生きものにとっても達成していくことが大切だと、参加者全員が体験を通して意識したよう感じられた。

【記録担当者】山口恭平



SDGs × わたし

実施者:高木 幹夫 ・ 武石 泉(株式会社日能研)

【概要】

今回の清里ミーティングのテーマである SDGs は、17 の目標と 169 のターゲットで構成されている。本ワークショップでは、SDGs に対する参加者の「違和感」や「いいね」を対話によって共有することで、深く読み解いていった。

【内容】

1) 自己紹介

参加者と実施者全員で部屋中央の机を囲み、一つの円形に並べた椅子に座った。一人ずつ順番に自己紹介を行った。

2) イントロダクション

今回は、世界を変えるための 17 の目標より、持続可能な社会に関する 1、2、3、4、5、6、7、10、11、16 の 10 項目を抜粋して考えた。

例えばターゲット 1.1 では「2030 年までに、現在“1 日 1.25 ドル未満で生活する人々”と定義されている極度の貧困をあらゆる場所で終わらせる」とある。しかし、1.25 ドルの価値観は地域で異なる。金額だけで貧困を語ることはいかなものか、そもそも金があることで貧困が生まれたのではないか。以上のような「へりくつ、おもいつき」は大切なものである。このような視点から、ターゲットを紐解いていく。

3) ターゲットの違和感と肯定感を明確に

参加者は、壁に貼られた 10 の目標とそれぞれに関するターゲットが記載されたポスターを各々で読み、緑・赤の 2 色のシールを貼る。赤は違和感のある部分、緑は参加者が「いいね!」と肯定したい部分である。ここでは匿名性をもって、他の参加者の視点も尊重するように配慮されていた。じっくりと読み、しばしば意見交換も行いながら、シールを貼っていった。赤色（違和感）シールが多い傾向にあった。

4) 日能研でのプログラム紹介

日能研で学ぶ小学 6 年生の子どもたちの、プログラムでの様子を手作りポスターで紹介した。今回のシールと同様に、違和感（赤）と肯定的共感（緑）を色分けしてコメント記入をしており、同じコメントが赤色で入ったり、緑色で入ったりと読み手によって視点が変わってくることが分かる。

5) 感想の共有

参加者 1 人ずつ、それぞれの感想や意見を述べた。改めて「目標」の考え方について立ち戻った。

【まとめ】

最後に、ターゲットの文言が短く、違和感シールの多かった「目標 7」と、肯定シールの多く集まった「目標 4」について深く考察を行った。

SDGs は世界共通の目標であるため、言葉の定義の曖昧さや解釈は開発途上国と先進国でも、地域や文化でも、翻訳の際にも異なってくるのかもしれない。

「へりくつ」という切り口から SDGs を読み込み、考え、意見交換をすることによって、自分自身によりいっそう身近なものになったのではないだろうか。

【記録担当者】柳川 真澄



協同学習の手法で環境教育をスキルアップしよう！

実施者：佐藤 敬一（東京農工大学農学部 環境資源科学科）

【概要】

本ワークショップは日本協同教育学会で扱われているアメリカ発祥のワークショップの技法やその効果を、実際に技法を体験しながら協同学習をいかに行なっていくかを学ぶことを目的として実施された。協同学習の代表的な研究者であるスペンサー・ケーガンの手法を中心に、実施者と参加者の間で対話をしながら進行が行われた。

【実施内容】

1) はじめに

ワークショップで取り扱う内容と、実施者の自己紹介を行なった。机には1～4の数字が書かれたパネルが置かれ、グループで話をするときやペアをシャッフルするときに使用した。

2) 協同学習の技法

・技法 ①：RallyRobin（代わりばんこに）

協同学習の技法を使って自己紹介を行なった。参加者はペアを組み、実施者から出されるお題（複数の答えができるもの。今回の場合は、「身に付けたい特殊能力」）について交互に答えを言い合う。

・技法 ②：RoundRobin（順番に話そう）

グループに分かれ、意見交換を行う技法を体験した。実施者から出された「地球上の水はどんな形で存在しているか」というテーマについて、参加者は自分用のボードに水の状態を書く。例えば、雨や雪、氷など様々な状態の水を考えることができるため、人それぞれに違いが生まれていた。参加者のなかには絵を書いて地球の水循環を表していた人もいた。書き終わると、それをグループで順番に答えを共有し、自分の思いつかなかったものは書き込んでいく。

・技法 ③：Timed Pair Share（お話タイム）、

技法 ④：Three-Step Interview（僕は君のレポーター）

まずペアで片方が聞き役になり、もう片方が話し役になる。聞き役は、聞いた内容を要約して相手に確認する。テーマは「自分の特技」。2分で話し、1分で要約をした。相手の話を自分が理解しようとすることで相手の話をより傾聴するようになる効果があることが説明された。次に、③のペアで聞いた話をグループで共有するワークを行なった。ペアの相手だけでなく、他子紹介のようにインタビューをしたペアの

特技を要約して全体に伝えた。

・実施者の活動の話

技法①～④の使った協同学習の具体例を、実施者の活動の中から紹介した。

・多様性のラインナップ

野良猫への餌やりや原発問題をテーマに賛成・反対に分かれる技法が紹介された。賛成・反対の程度（1～10）で一列に並び、半分でわけて議論する。こうすることで、自分とは遠い考えを持つ人とも話し合いをすることができるのだと説明がされた。

・トンボ池

最後は、トンボ池というプログラムを行なった。まちづくりを通して、利害関係者が合意形成する過程を学ぶ。参加者は各役割になりきって、自分の利益を主張しつつ、よりよい街を目指して議論を行っていた。

3) ふりかえり

参加者からの感想で最も多かったのが「傾聴すること」の大切さだった。相手の話を聞いて理解しようとすることや、自分とは違う意見を持つ人の話を理解しようすることを気づいたこととしてあげていた。

【まとめ】

全体の雰囲気も良く、ワークのたびに笑顔が見ることができた。今回の大きなねらいは、ケーガンの協同学習法で挙げられている「互恵的な協力関係」、「個人の責任が明確」、「参加の平等性」、「活動の同時性」の4つを参加者に実践してもらうことであった。最後のふりかえりでも、傾聴することや、合意形成することの重要性を考えた参加者が多かった。協同学習の手法を学んだことで、それを活用したいという参加者もいた。このワークショップを通して、環境教育のスキルアップは参加者に起こっているようだった。

【記録担当者】佐藤 琢磨



環境思想を考える

実施者:岡島 成行(学校法人青森山田学園)

【概要】

環境問題の歴史を辿りながら、その時代に生まれた思想に関する人物や書籍などを紹介。1 時間半ほどスライドを見ながら、実施者が環境問題について日本や外国の歴史をレクチャーした。

【実施内容】

1) 自己紹介

実施者を含め 8 名で机を囲み、名前、所属先、自分の活動内容など全体で 30 分ほど自己紹介を行った。

2) 20 世紀の歴史

車や飛行機が作られ、2 つの大戦、原子力爆弾、宇宙ロケットで月へ、と 100 年間で世界は劇的な変化を迎えた。現在もそのスピードは加速し、「人類革命」が起きている。そして環境問題は、たった 50 年で壊滅的な破壊が始まる。

実施者によるスライドショーを見ながら、20 世紀の環境問題に関する歴史が語られた。

3) 環境問題の発生

地球が生まれて 46 億年、人類が生まれて数 100 万年（ここで環境破壊が生まれる）、科学技術文明が発達して 400 年、大規模な自然破壊・公害がここで発生する。さらに時代は進み第二次世界大戦後 60 年、地球温暖化や気候変動による災害、生態系の破壊など壊滅的な破壊が起こる。

環境問題は どうして発生するのか。それは、人間の活動が自然の浄化力を上回ってしまったから。つまり、人間の生活の仕方が問題である。これからは、人間の生活と自然との調和が必要である。

①環境問題の改善と危機

環境問題をどのように克服していくべきか。科学技術の発展や社会科学による改善はもちろんだが、それだけでは足りない状況になっている。そこで人文科学の出番である。

地球温暖化の危機は、人類の活動を要因とする温暖化の進行むと、地球のシステムに影響し、地球自身が温暖化を進めてしまう。そうなれば、誰にも止めることができなくなる。そうならないためには、人間の生き方を変えていかなくてはならない。

②これからの生き方

人間が幸せに生きていくためには、自然を壊さず、欲張らず、自制しながら、新しい価値を身に付ける。つまり、人間中心主義から自然共生主義への転換が必要である。そして、あらゆる文明の成果を勉強し直し成果を検証することで、人類の英知を総動員する。

③日本の可能性

江戸に見る「素朴な生活」と「高度に発達した科学技術」の調和が江戸の町に垣間見ることができる。いかに巧みに調和させるか。その方法を最初に確立させた国こそが、実質的に 21 世紀を導くことになるというところで、スライドショーはまとめられた。

4) 感想

参加者から 1 人ずつ、感想を共有した。全体で 30 分ほどだが、その中で、さまざまな意見が出された。人間の生き方を変えていくことは容易なことではなく、便利な世の中から不便な世の中になるというのはなかなか受け入づらいと考えられる。そのため、子どもの時から環境教育を行い、大人になるまでにそういった生活スタイルを身に付けていくことができたらいい、という感想が印象的だった。

【まとめ】

今回、実施者が関わってきた活動を中心に、環境問題の歴史と日本の可能性を示し、人間中心主義から自然共生主義へ転換することに火調整が語られた。そのためには人間の生き方の見直しが必要であり、これからその生き方を変えるためにはどうしたらいいのかを話した。参加者同士での熱い議論がかわされた。

【記録担当者】吉田 直哉



生きものの魅力で心を動かしたい

実施者:猪俣 寛(公益財団法人日本野鳥の会)

【概要】

「生きものの魅力」をどう伝えれば相手の心に届くのか、新しいアプローチ方法を考えることをねらいとしたワークショップ。人々がそれぞれ違う視点を持つことを認識し、言葉などの断片的な部分から、それぞれの世界観を共有することによって、新たな生き物の魅力に気づく。参加者は実際に1時間ほど森の中で自然体験をした後、採集した物の観察会を行った。そのあと、3~4人のグループで自己紹介などをしてから自己の自然との触れ合いについて語り合い、キーワードを出し合って、全体で語り合いながら共有した。

【実施内容】

1)導入・ワークショップのねらいと流れについて

最初にスライドショーでムササビの写真を見た。それぞれ印象の違う写真を映しながら、同じ動物でもイメージの違いが異なることに気が付いた。生き物を観察するときに、それぞれが全く違う視点をもつことから、一人ひとりが異なる世界観を持っていて、それを共有するときに、まとめてしまうのではなく、言葉の断片を共有することによって、人それぞれが持つ異なる世界観に気づくことができるのではないかという提案を行った。

2)フィールドワーク・観察会

改めてワークショップのねらいについて参加者と共有し、1人1つ虫めがねのついたケースが配られた。参加者は自分と生きものとの出会いについて思い出しながら、森の中を1時間ほど探索した。建物についているオオヒメグモの巣の糸を動かして、違う壁につけて見せたり、リスなどが食べた松ぼっくりがエビフライのような形になったものや、鹿のフンや木の実を食べに来たメジロ、ムカデなど様々な生きものやその痕跡が見つかった。参加者は寒さを忘れたように、探索に夢中になっていた。

フィールドワークから帰ってから、参加者の捕まえた虫や見つけた生きものの痕跡などを虫眼鏡で観察した。途中、捕まえてきたハエを同じケースに入れてきたクモが食べてしまうアクシデントが起こるなど、自然界の厳しさを目の当たりにした。また、キジの羽に水滴を垂らし、参加者同士で水滴リレーも行った。

3)グループワーク・全体共有

3~4人のグループになって、自己紹介をするとともに、自身の生きものとの思い出や関わり方について語り合った。そして、グループで語り合った話の中で気になったり、思い浮かんだりした言葉をA4の紙に絵や言葉で書き留めて壁に貼り、みんなで眺めた。ほかのグループから出た言葉について、気になったものについて質問し、書いた人がさらに説明を加えるなどして、生きものについての他者のもつ世界観を参加者の中で共有し合っていた。小さな昆虫の周囲の空気は、昆虫にとっては、重く感じられることや、猫が死ぬ間際になると、それを予感するような行動をとることなど、興味深い話を伺った。

【まとめ】

本ワークショップのねらいは、断片的な言葉を共有することによって、自分と他者の持つ世界観の違いに気づくことであった。森でのフィールドワーク中、普段は目を向けない場所や生きものに焦点を当て、冬でも豊かな清里の自然に驚いている様子だった。また、フィールドワークの後に行われたグループワークや、その後の全体での語り合いでは、参加者は自身の体験のみならず、他者の話を共有することによって、自身の知らない生きものの魅力について新たな発見や関心を抱いたようであった。

【記録担当者】鈴木 奈美



森林療法×環境教育～癒しが持つSDGsへの可能性

実施者:飯田 みゆき(特定非営利活動法人日本森林療法協会)

【概要】

自然の中で得られる「癒し」の体験をSDGsに活かすことができるのではないか、という可能性を提言するワークショップ。前半は、「癒しがもたらすSDGsへの可能性」の説明を資料で行い、10分ほど自然の中に身を置き、後半は、そこでの実感をもとに、ワールドワーク(反対意見者との対話から共通の願いを探るグループワーク)を行った。

【実施内容】

1) 自己紹介

円座になり、「所属、参加理由、ワークショップから帰って帰りたいもの」という3つの質問に答える形で参加者の自己紹介を行った。参加理由として、「自然とのふれあい方がわからない人々に森林療法の提供をしてみたい」という参加者の声もあるように、新しい自然との関わりを提供できるようになりたいという声が多くあった。

2) 「癒しがもたらすSDGsへの可能性」の説明

パワーポイントの資料に沿って、森林療法とは何か、環境教育と森林療法の先にある「自分と自然の一体感＝癒し」へのプロセス、その心理学的視点、「癒し」からどのようにSDGsにつながるのか等について、実施者から説明があった。

3) 外で「気づき」を10個見つける

外へ出た途端、一人の参加者が寝転がった。それを見た他の参加者は、次々に寝転がっていった。その他にも、座る人、空に手を伸ばす人、空を見上げる人、鳥の声だ!と言って音に耳を傾ける人がいた。そして、「気づき」を10個見つけるために、それぞれがその場で内省している姿があった。

4) 室内にて「気づき」をシェア

3人1組になり、室内に戻って「気づき」のシェアをした。その後、全体でもシェアの時間が設けられた。動物の排出物は一人では注目せず避けるものであるのに、「同調」という心理から引き起こされたことなのか。また、「一人が寝転んだ瞬間、他の参加者も次々に寝転び始めた」ということに焦点が当たり、掘下げていく中で子どもと大人の

自然体験の違いについて話が展開していった。

6) ワールドワーク

「来ない人を感じてみる(自然体験の良さを知らない人々の立場になって考えてみる)」というワールドワークを行った。参加者は自由に「子どもに自然体験をさせたくない親」と「自然体験の良さを知り、自然体験を推進する人」の立場を選んで、二手に分かれた。

序盤は、「子どもに自然体験をさせたくない親」が多かった。「自然体験の良さを知り、自然体験を推進する人」は、「子どもに自然体験をさせたくない親」側からの意見に答え難い様子だった。たとえば、「子どもに自然体験をさせたくない親」側から、「自然体験によって感性が育つ」というが、美術館でも感性育つのではないか。お金がなくて自然の場に行くための装備が揃えられない。」といった意見が出ていた。それらに対して、「自然体験の良さを知り、自然体験を推進する人」は、「自然体験不足により、病気になっている人が増えているというデータが出ている」などの意見を返していた。

【まとめ】

「癒し」の定義の奥深さを知り、自然の場における人の心理学的側面を知ることができた。「癒し」の一つである「自分以外のものに心を開くこと」を、外に出て自然の中に身を置いて気づきを得ることと、ワールドワークによって体験することができた。また、ワールドワークによって、参加者が自身の活動における課題を客観的に見る機会になっていた。

【記録担当者】鈴木 佑実



つなげよう！自然体験型エコツアーとSDGs

実施者:小河原 孝生(特定非営利活動法人生態教育センター)

【概要】

エコツアーを良く理解し、SDGsに関心の高い人向けのワークショップ。エコツアーと身の回りの生活におけるSDGs17の目標の繋がりを理解するための90分程のレクチャーと、「自然体験型エコツアーをSDGsと繋げる」をテーマに、参加者の考えを落とし込むための60分程の対話型・柔軟型のグループワークを行った。

【実施内容】

1) 自己紹介・アイスブレイク

参加者同士の自己紹介とアイスブレイクを行った。1枚のA4用紙にSDGs17の目標から自分の活動と繋がっているものを2,3種類書き出し、それを基に、仕事内容等の活動紹介とその活動における課題を紹介。参加者11名が円になり、時計回りで一人ずつ自己紹介とそれに対する質疑を行った。

自己紹介の後、参加者の活動を聞いて、SDGs17の目標のうちのどれが一番多かったのかを全体で共有した。

2) グループワーク・合意形成

4人組になり、国内エコツーリズムにおいて重視されるべき17の目標を順位付けするグループワークを行った。

グループで出た意見は全体で発表し、結果を共有した。一部の参加者からは、「17の目標の順位を考えるということは、減多にしたことがないので、考えられて大変満足した」という感想があった。

3) 実施者からのレクチャー

グループワーク後、「身の回りのエコロジー」をキーワードにしたレクチャーが実施者より行われた。

①水の足跡

人間は1日にどれくらいの水を利用しているかを考えた。生き物と水を分かち合うために、私たち人間にできる活動を紹介。参加者からは、1日の水の使用量を目にして、「人も生きものも水なくては生きられない」ということを改めて気づくことができたという意見が出た。

②子ども向けワークショップの紹介

NPO 法人早川エコファームが実施する子ども向けの学

習型・参加型のプログラムの紹介。ネイチャーブリッジ、水の健康チェック、山歩き等を通じて、子どもに自然を知ってもらうのではなく、感じてもらうことを目的としたワークショップの事例紹介を行った。参加者は、事例紹介を基に、自身の活動へ取り入れられる要素を考えていた。

③EGOとECO

EGOとECOを表すプリントを見ながら、ECOな社会の在り方について考えた。エコだと思いながらやっている活動も実はエゴかもしれないという話を聞きながら、「ECO」とは何かについて考え直した。

4) グループワーク・振り返り

最後に「自然体験型エコツアーとSDGsを繋げる」のテーマでグループワークを行った。

4人組に分かれ、「地域の課題」「地域の目標」をブレインストーミングし、最終的にエコツアープログラムの提案を行った。

参加者からは、課題からビジョンを見出していき、エコツアープログラムを考えることによって、「エコツアーとSDGsの繋がり」への理解を深めることができたという感想が出された。

【まとめ】

本ワークショップのねらいは、「SDGs17の目標」と「自然体験型エコツアーとSDGsの繋がり」の理解を深めることであった。参加者は、90分程のレクチャーを受け、2回のグループワークを行ったことによって、ワークショップのねらいを掴めることができた様子だった。多くの参加者が、長い時間をかけてSDGs17の目標1つ1つと向き合ったのは初めての様子で、本ワークショップに参加したことに非常に満足そうな様子だった。

【記録担当者】岩本 彩夏



CSR プログラム事例で学ぶ社会的インパクト評価

実施者: 今田 克司(一般財団法人 CSO ネットワーク)、藤木 勇光(J-POWER 電源開発株式会社)

【概要】

本ワークショップはロジックモデルを作ることを通じて事業の目標や成果を明示的に意識すること、可視化することを目的として行われた。ロジックモデルはPDCAサイクルを回す際の計画部「Plan」で作成し、サイクルを回しながら定期的にチェックすることが望ましい。つまり、ロジックモデルを使用することで自身の計画づくりやその後の実施段階、実施後の振り返り段階などで、「ねらったことが、達成できているか」をつねに意識し、測定することができる。

【実施内容】

1) 導入・事例紹介

ロジックモデルとは何か、なぜ必要なのかといった解説の後、実施者より実際の事業の紹介を基に話題提供がされた。そして、その事業におけるロジックモデルの説明があった。これにより、参加者のロジックモデルに対する理解を深めた。

2) 自己紹介

参加者の自己紹介を行った。ロジックモデルへの興味と、その後のワークショップに備え、実際に評価したい事業についての紹介を行った。

3) ロジックモデルの考え方、作り方

ここでは、ロジックモデルを作る際に必要な評価の基本的な考え方と作り方の説明を行った。特に、評価とは「なんのため?」「だれのため?」という点を意識しながら、ロジックモデルの必要性和、つくる際の注意点の説明を行った。

4) 質疑応答

ワークショップを行うにあたって、質疑応答が行われた。参加者からは積極的に質問が寄せられた。質疑応答の時間を十分にとり、実施者が一つ一つ丁寧に説明することで、参加者はロジックモデルへの理解を深めている様子だった。

5) ワークショップ

参加者が自身の活動をもとに、ロジックモデルをつくった。簡単なフレームワークを使い、一人ひとりが自分の活動に関して成果に至る道筋を考えた。ある程度できたところで2人組になり、お互いのロジックモデルを見せ合った。参加者は自身の活動を簡単な文章で分かりやすく表現することにとても苦労していた。

6) 発表

代表として岡山県自然保護センターの山田さんが事例を発表した。妖怪という面白い切り口から子どもへの自然体験を提供する山田さんは、自身の活動の効果を改めて整理し、再確認することができ、とても満足した様子であった。

【まとめ】

ロジックモデルをつくって活動を評価することで、環境教育業界ではおろそかにされがちな「活動のふりかえり」と「改善」を的確に行うことができる。評価するときに、鳥の目（長期的な目線）と虫の目（短期的な目線）を意識することで、さらに客観的に自身の活動を評価することができる。

【記録担当者】 永沢 亮祐



パートナーシップでつくる「キヨサト」SDGs 企画

実施者:藤本 亜子・村尾 幸太(一般社団法人環境パートナーシップ会議)

【概要】

複雑化する社会課題は相互に関係しており、それらを解決するためには、様々な立場で力を合わせる「パートナーシップ」が必要である。本ワークショップでは、参加者が架空の町「キヨサト」の住人となり、環境変化に対して考えられる要因・SDGs 課題をあげ、解決策の企画、ブラッシュアップをした。SDGs の 17 目標のひとつである「パートナーシップ」の必要性を、体験的に理解した。

【実施内容】

1) 「キヨサト」を描く

パートナーシップでつくる SDGs 企画を考えるにあたり、1 枚の A4 用紙に、舞台となる架空の町「キヨサト」の絵を描く。指示に従って川、木、家、田んぼなどを描き足した。そこで「キヨサト」は 3 つの流域に分かれていることや、環境条件は各流域により異なることが分かった（今回は上流域＝森林、中流域＝水田、下流域＝漁業がさかん、とした）。また各流域における課題があること、流域全体は、自然環境の荒廃・地域産業の衰退・過疎化・高齢化という傾向があることを共通で認識をした。

2) 流域の課題とその要因を確認する

全体をグループに分け、各グループに「キヨサト」の流域が割り当てられた。そして、流域における課題の背景を想像し、各参加者が個人の意見を書きとめ、その後グループ内で共有し、自由に話し合った。割り当てられたのは 1 つの流域であったが、その流域で起こっている課題は、その流域以外の流域と因果関係にあるものも存在することを確認した。

3) 課題解決と SDGs を紐付ける

各流域で起こっている課題の要因を解決することが、SDGs のどの目標に結びつくのかを考えた。例えば、ある流域の特徴となっている田んぼに対しては、収入減、お米を食べる人の減少、イノシシ対策ができない、担い手不足などの課題があげられた。それらの課題を解決することは、いくつかの SDGs 目標に結び付くことが分かった。

4) 課題解決に向けた企画を考える

様々な立場や視点からアプローチすることで、ひとつの課題に対して、多くの解決策・企画をあげた。

5) パートナーシップで環境教育に取り組む事例紹介

持続可能な地域づくりのための「学びの拠点づくり」に関する事例が紹介された。栃木県の事例は、生きものとのふれあいを重視したプログラムを、動物園、水族館、自然学校、行政等、多様な主体とパートナーシップで取り組んだことにより、「地域を良くしていく学びの機会づくり」へ視野が広がり、プログラムの見直しから、「水辺の生き物観察会」や「地域勉強会」までコンテンツが増えた、という事例だった。

6) パートナーシップの視点で企画のブラッシュアップ

事例を踏まえ、異なる組織によるパートナーシップで、成果を最大にすることを意識した。今回の企画では、流域における課題の解決策を、だれと一緒に取り組むのか、パートナーを抽出し、再度、企画をグループで話し合った。

7) 分かち合い

各グループの企画を発表し、流域ごとのパートナーシップでつくる「キヨサト」SDGs 企画の分かち合いをした。

【まとめ】

企画を立案するということを通して「パートナーシップ」の重要性を体験的に学んだ。「パートナーシップ」で取り組むことは、特別な能力ではない。「パートナーシップ」をとることで、視野が広がり、出来ることが増えたり、新たな可能性や発展に繋がっていくことを学んだ。

【記録担当者】坂川 実基



環境教育研究 & 実践から考える SDGs

実施者:朝岡 幸彦(東京農工大学)、阿部 治(立教大学)、小玉 敏也(麻布大学)、
増田 直広(公益財団法人キープ協会)、川嶋 直(公益社団法人日本環境教育フォーラム)、

【概要】

環境教育とSDGsに関する基本的な解説や、実施者の取り組みが紹介され、それに基づくディスカッションが行われた。最終的には、参加者がこれからの生活でどのようなSDGsを実践できるかということに帰結した。多様な意見が出され、活発な議論がされた。

【実施内容】

1) 自己紹介

参加者全員で円になり、自己紹介を行った。北海道から九州まで全国各地から環境教育やSDGsに関心のある方々が集まった。和やかな雰囲気の中で冗談も飛び交った。

2) 実施者によるレクチャー

講演+参加者同士のディスカッションという形式で進められた。

・阿部 治 : ESD と SDGs の関係

ESD(持続可能な開発のための教育)とSDGsの関係に関する全体像の話がなされた。

2015年に国連で開催された「国連持続可能な開発サミット」の中で、人間、地球の繁栄のための行動計画として、宣言及び目標を掲げたことが紹介された。この目標がミレニアム開発目標(MDGs)の後継であり、17の目標と169のターゲットからなる「持続可能な開発目標(SDGs)」と定められた。SDGsが採択される際、ESDの概念をその中に盛り込むために様々な国やNGOとの交渉が行われた。結果、SDGsの条文の中にESDに関する記述が入り、ESDが今後も継続されていくことになったと紹介した。

・増田 直広 : エコエネ子どもキャンプ

SDGsを地域に落とし込んだ活動の紹介がされた。冒頭のキープの取組みの紹介がされた中で、「エコエネ子どもキャンプ」が取り上げられ、スライドショーの上映を通して実際のキャンプの様子が紹介された。キーワードは「ぐるぐる、つながり」。じゃがバター作りや牛の観察・餌やり、森や川の探検などのプログラムがあり、最終日には2日間出会ったエネルギー・生き物・食がどうつながっている

かをグループで考えるという報告がなされた。

・小玉 敏也 : 社会に開かれた教育課程

教育課程には、学校と地域の連携における課題があるとして、「社会に開かれた教育課程」の捉え方について紹介された。現在では学校と外部との関わりが増えてきており、コミュニティスクール化など地域との連携強化が進んでいる。その中で教育課程、特に「総合的な学習」「特別活動」における地域ぐるみの話し合いが必要だと強調していた。教育課程を介した地域との連携のあり方は、地域ぐるみでSDGsをローカルにする場だとまとめていた。

・朝岡 幸彦 : 福島プロジェクト

SDGsをローカルで実施する取り組みとして、2011年5月から実施されている「福島プロジェクト」がスライドショーとともに紹介された。これは避難者に対するいじめに関する実態調査が目的で、福島県飯館村で行われたのが始まりである。その後も「原発事故後の福島を考える」という趣旨で毎年福島の人々の話を伺い、記録するという取り組みを行っている。

・川嶋 直 : 議論の整理

最後に、これまでのレクチャーや報告のまとめとして環境教育に関する全体的な話がされ、「今後自分たちの行動をどうしていきたいか」をテーマに参加者同士で話し合いが行われた。

【まとめ】

ESDとSDGsに関して具体的な活動例も踏まえながら、参加者も巻き込んだ議論がされた。意欲的な参加者が積極的に発言し、活発な意見交換がされた。

【記録担当者】伊藤 直道



参加者がそれぞれ企画・実施者となり、参加者同士が刺激を受け合い、意見を出し合い、共に学ぶ場。

本年の清里ミーティングのキーワードである SDGs の達成には、「アドボカシー（問題について知り、解決に向けて声を上げること）」と「プログラム実施（解決に向けた具体的な行動）」が必要であるといわれている。

そこで 2 日目午後の参加者企画ワークショップは、プログラム実施に重点を置き、参加者自身が実践している、あるいはこれから実践しようとしているアクティビティの体験等ができる「体験型ワークショップ (E)」、またこれまで清里ミーティングでワークショップの実施経験のない方の優先枠「フレッシュパーソンズ・ワークショップ (F)」として、参加者から実施者を募集し、下記のワークショップが実施された。

- 11. 持続可能な「ミライ」をつくる人材育成の在り方 : F
- 12. 森林療法～調和する自己の持続可能性 : F
- 14. 火を囲み、みんなで作る「居場所」づくり : E
- 15. KP 法で SDGs を整理してみよう : E
- 16. 17 の SDGs で柔軟な頭を作るゲームを : E
- 17. アナログゲームで環境を学ぼう ! : E
- 18. 「教える」より「学びあう場」を創ろう ! : E
- 20. 「うんこ」から自然を見る ～教材化の面白さと可能性 : F
- 22. 自然をフィールドとした父親参加型のわんぱく子育て : E
- 23. 既存のプログラムを SDGs ナイズ大作戦 ! GEMS 編 : E
- 24. SDGs と森里川海、そしてライフスタイル : E
- 25. 目からウロコ、環境教育のためのミニマム天文基礎講座 : E
- 26. 公害と SDGs JEEF・あおぞら財団の協働 FW : E
- 27. 一体感を生み出す魔法の技術 ! アイスブレイク三連発 ♪ : E

また、特別実施ワークショップ枠として下記のワークショップを行った。

- 28. 音楽フェス×環境教育@清里 超実践体感ワークショップ

尚、以下のワークショップは参加者の都合により中止となった。

- 13. 野外活動を 120%楽しくする図鑑の読み方・使い方 : F
- 19. 自然を使った深く自分と繋がる体験ワークショップ : F
- 21. 環境ポータルサイト「BLUE SHIP」の活用方法 : F

WS11:フレッシュパーソンズ・ワークショップ(80分)

持続可能な「ミライ」をつくる人材育成の在り方

実施者:江利川 法孝、坪松 美紗(久志地域交流推進協議会)

【概要】

持続可能な社会を作っていかなければならない現代において、「SDGs」の達成に向けた人材育成の在り方を考えるワークショップ。ゴールを「考える」ということに設定し、グループワークの後、各グループが意見を共有した。

【実施内容】

1) KP 法によるテーマの説明と自己紹介

はじめに、実施者がKP法(紙芝居プレゼンテーション法)を用いてワークショップの経緯、動機について説明した。続いて1枚ずつA4用紙が配られ、名前・所属・参加の動機・自身の立場(自分は次世代へバトンを渡す側なのか、受け取る側なのか等)の4点を記入し、自己紹介を行なった。

2) グループワーク

本ワークショップのゴールを設定した。今回は「考える」

ことをゴールとして、3人1組のグループに分かれ、「否定はしない」というルールを設け、ディスカッションを行なった。テーマは、自己紹介の際に記入した「自分の立場(渡す側なのか、受け取る側なのか)」と反対の立場になって考えることを踏まえた「持続可能な人材育成の在り方」について考えること。ディスカッション後、各グループから出された意見を全体に共有した。

【まとめ】

「考える」ことがゴールであったが、様々な意見が出て参加者間で議論が白熱した。各グループの意見の中で共通して「コミュニケーション」という言葉が頻出していたのも印象的であった。

【記録担当者】松岡 信吾

WS12:フレッシュパーソンズ・ワークショップ(80分)

森林療法～調和する自己の持続可能性

実施者:松尾 祥子(SAFARI)、飯田 みゆき(NPO 法人日本森林療法協会)

【概要】

森林療法の手法をもとに、2つの呼吸法を用いて、森の中で自然や自己と向き合う時間を過ごした。前後に絵を描き、それを比較することで、参加者の感情の変化について、実施者から解説した。

【実施内容】

1) 自己紹介・森林療法の説明

はじめに参加者および実施者で自己紹介を行った。参加者は名前・所属・参加の動機を紹介後、実施者よりワークショップの導入と、自身がなぜ森林療法を行っているかの説明を行った。

2) 森林療法の体験

① 絵描き

A4用紙を2枚ずつ参加者に渡し、「実のなる1本の木」「木と人と家」の2つのお題に対してクレヨンを使い、絵を描いた。

② 森林療法

絵を描き終えたところで外に出て、清里の森を歩き、実際に森林療法を体験した。実施者の声と動きに合わせ、参加者は呼吸を合わせた。次いで、グラウンディングというワークを行った。実施者の声に合わせて、脳から心臓の鼓動、足の裏まで自分を感じる。参加者は実施者の声に合わせて、真剣な面持ちで行っていた。

③ 絵と気持ちの共有

体験終了後、絵を描き終えたところで、①で描いた絵と比較し、絵から分かる参加者の気持ちの変化について実施者が解説した。

【まとめ】

雪が舞う寒い森林の中、参加者から「寒い」などの声が上がったが、実施者による森林療法が始まると皆真剣に取り組んでいた。

【記録担当者】高橋 直樹

WS14:体験型ワークショップ(80分)

火を囲み、みんなで作る「居場所」づくり

実施者: 谷口 哲郎、生田 香織(特定非営利活動法人つがる野自然学校)

【概要】

全員で焚火を囲み、焚火で料理を作ったり、普段の活動を共有したりする場を作る。

【実施内容】

1) 火をつける・料理の準備

本ワークショップに欠かせない焚火の準備をした。今回は牛乳パックに火をつけたが、ガムテープなど石油が原料のものを火種にするとよく燃えるとのこと。参加者の中から火をつけたことのない人が挑戦した。火がうまくつかなくても、あきらめる様子はなく、より積極的に火をつけようと奮闘していた。火がつくと、とても満足そうな表情だった。

焚火の準備をしている横で、料理の準備もした。メニューはなめこ焼きとクラムチャウダーだ。

2) 自己紹介

無事に火がつくと、焚火のまわりに集まって自己紹介を行った。焚火の準備で緊張が解けたのか、堅くなっている参加者はいなかった。

3) 料理完成

ダッチオーブンを使って調理したクラムチャウダーが完成し、全員で食べた。塩とこしょうで味付けしただけとは思えないほど味がしっかりしており、食材が本来もっているうま味がでていた。参加者は寒い中で温かいスープを食べ、とても満足そうであった。

【まとめ】

今回、「居場所」を作ることで、参加者同士に連帯感や共有感ができ、仲間ができていた。最初は少しぎくしゃくしていたが、火を囲みながら料理を食べたり、話をしたりと時間を過ごすうち、ひとつの居場所を共有していた。

【記録担当者】 濱崎 竜斗

WS15:体験型ワークショップ(80分)

KP 法で SDGs を整理してみよう

実施者: 川嶋 直(公益社団法人日本環境教育フォーラム)

【概要】

シンプルなプレゼンテーション手法であると同時に、思考整理法として活用されるKP法(紙芝居プレゼンテーション法)。このKP法のお手本を踏まえ、参加者自身の「SDGs 行動目標」を考え、整理し、グループ内で共有した。

【実施内容】

1) 皆さんを知る

本ワークショップの概要が解説された後、5名ずつグループになり、自己紹介を行った。参加者同士とても和やかな空気感で、話も弾んでいた。

2) KP 法を作ってみる

まずは実施者によるKP法でのSDGsの解説を見てから、実際に参加者もKP法に挑戦する。テーマは、SDGsを絡めていれば何でもOK。スラスラとペンを走らせる人、頭を抱えて考え込む人など反応は様々だった。

3) 作成したKP法の発表

作成したKPをグループで発表した。話の展開の仕方や、イラストをいれたものなど、それぞれの個性が表われ、面白いものもいくつも出来上がっていた。発表後はフィードバックシートに感想を記入し、グループ内で意見交換が行われた。

4) KP 法の作り方

KP法の作り方や特徴、ポイントなどの解説が行われた。KP法はプレゼンテーション法であると同時に、思考整理法である。KP法で大切な3つのポイントは、「受け手のことを考えよ」「情報を絞り込み、捨てる」「時間と空間をデザインする」とのことだった。

【まとめ】

シンプルでわかりやすいKP法。作成するまでには、色々と考え、情報を整理、そしていらぬ情報を捨てる。実際にやってみると、思考整理につながることを体感できた。受け手の気持ちになって作成することの大切さを再確認できた時間だった。

【記録担当者】 岡野 由美

WS16:体験型ワークショップ(80分)

17のSDGsで柔軟な頭を作るゲームを

実施者:長沢 恵美子(一般社団法人日本経済団体連合会)、瀬尾 隆史(公益社団法人日本環境教育フォーラム)

【概要】

SDGs についてそれぞれ思いや考えがあると思われるが、やわらか頭で考えるワークショップ。SDGs というテーマを、楽しみながら進めるのが今回の特徴だ。

背景として、活動に SDGs の目標アイコンをあてはめる「マッピング」で留りがちであることから、新しい視点で発想し、共有価値創造につながるような疑似体験ができれば良いとの企図で実施した。

【実施内容】

4〜5人1組になり、サイコロ2個を同時に2回ふり、それぞれ合算の数字をSDGs17の各目標の番号にあてはめる。この2つの目標へ同時に取り組むプロジェクトをグループで考える。参加者は、各人の経験や能力を最大限引き出しながら、アイデアやキーワードを出し合った。短時間の中でのプロジ

ェクト立案だったが、グループで意見を交わしてまとめ上げ、発表した。2つの目標をテーマにすることでさまざまなつながりが見えてきた。そしてどの目標をテーマとしてプロジェクトを実施したとしても、他の目標とつながってくることを、再確認する機会になった。

【まとめ】

最後に、実施者から事例の紹介があった。その事例は取り組み内容が全てつながっており、1つの資源循環モデルを生み出している。さらに広がりを持たせるためには「協力者の足し算」と「テーマ(目標)の足し算」がポイントとなる。

主軸となる目標だけではなく、他の目標との関連性も含めてプロジェクトを工夫し、行くとよいということが理解できるワークショップであった。

【記録担当者】中山 孝志

WS17:体験型ワークショップ(80分)

アナログゲームで環境を学ぼう！

実施者:奥宮 健太(BEANS BEE)

【概要】

3つのグループに分かれ、自然環境について学べるアナログゲームを体験し、「お気に入りのゲーム」「環境ゲームの使い方」「開発のコツ」の3つのテーマで参加者と実施者で意見交換を行った。

【実施内容】

1) 自己紹介、お気に入りのゲーム

名前、ワークショップの参加動機、今までやってみて良かったゲームとその理由を紹介した。

2) ゲーム紹介

各地で制作された環境学習ゲームリストを配り、カンタに紹介して、実際のゲームをみたり、触ったりした。

3) ゲーム体験

紹介したゲームから、愛知県が作成した『カッパの清吉』実施者の開発した『どうぶつの里』『マザーアイランド』を行った。『カッパの清吉』は、海ごみの問題が学べる。『ど

うぶつの里』は、里山に生息する動植物が学べる。『マザーアイランド』は、小笠原諸島の生物や外来種の脅威について学べる。ゲーム実施後、ゲームの体験について語った。

4) ゲームについての対話

ゲームを実施した後は、参加者の興味から「ゲーム開発について」「環境系アナログゲームの使い方」「最初に発表した面白いゲームの詳細」の3つのグループに分かれ、意見交換を行った。

【まとめ】

アナログゲームを通して、楽しみながら環境に親しみ、大人にとっても勉強になる内容であった。どのゲームも楽しくて親しみやすく、自然環境を直感的に知ることができた。

【記録担当者】珠村 智

WS18:体験型ワークショップ(80 分)

「教える」より「学びあう場」を創ろう！

実施者:中野 民夫 (国立大学法人東京工業大学リベラルアーツ研究教育院)

【概要】

東京工業大学で実際に行っている参加型授業に関するミニ講義を行い、「学びあう場」を理解した。中盤には、輪になって歌おう（えんたくんの歌）を参加者全員で歌唱し、実際にえんたくんを使って参加型授業を体験した。

【実施内容】

実施者から東京工業大学での大学改革と立志のプロジェクトに、参加型授業がどのように活用されているか解説があった。その後、5分間でふりかえりシートを記入した。

4人1組でえんたくんを囲み、ふりかえりシートをもとに1人ずつ話した。聞き手はマーカーで自由にえんたくんに書き込み、見える化する。その後、1人だけを残し、メンバーを

変えた。残った1人が前半で話し合われた内容を他のメンバーに説明し、それをもとに対話した。

最後は全員で大きな輪を作り、感じたことを1人ずつ話した。輪になることで一体感を感じ、参加者同士が「学ぶ場」を創っていた。

【まとめ】

本ワークショップでは「学びあう場」をどう創っていくかについて、ミニ講義とグループワークを通じて学んだ。参加者同士がえんたくんを活用し学びを深めていくことで自らの学びとなり、その場こそが「学びあう場」であることを体感できた。終了後、えんたくんを写真に収めたり、えんたくんの周りで会話が弾んだりと盛り上がっていた。

【記録担当者】 川嶋 晴

WS20:フレッシュパーソンズ・ワークショップ(80 分)

「うんこ」から自然を見る ～教材化の面白さと可能性

実施者:福藺 恵子(諫早市こどもの城)

【概要】

実施者が作成したオリジナルプログラム「UNCO (ユー・エヌ・シー・オー)」を体験し、本物の「うんこ」を見たり、においを嗅いだりしながら、生き物の暮らしの多様性を覗き、うんこから「循環」の謎に迫るワークを行った。そして実施者がプログラムを用い、実践して見えたことや体験の紹介を行った。さらに実施者から参加者に向けた「UNCO」プログラムを実施するためのポイントやアドバイスを行った。

【実施内容】

まずはなぜ「UNCO*」と英語表記なのかを含め、ワークショップの解説があった。それからにおいを嗅いだり、形の意味を考えてみると、うんこについてあらゆる視点から考えた。参加者は驚きつつも、解説を聞くと納得した表情になっていた。

続いてうんこに関するミッションが3つ、参加者に与えられた。ミッション1は、実施者が持参したうんこの標本を見たり、においを嗅いだりして、どの動物のうんこか当てるゲ

ームを行った。参加者は真剣な表情でうんこを見分けていた。続いてミッション2は、うんこの写真を見て、季節を探る。ミッション3は、“うんこの「その後」の謎を解け”と題し、うんこがどのように「循環」しているか、うんこが生態系に果たす役割を探った。

最後に参加者の感想の共有と、実施者による本の紹介が行われた。参加者から「とても面白かった」「うんこはどうやって見分けたらいいの？」などの感想や質問があがった。

*UNCO=Unidentified Natural Cycling Object (未確認自然循環物体)。うんこから「自然の循環 (Natural Cycle)」の「謎 (Unidentified)」を探るプログラムで、現在商標を出願中。

【まとめ】

実施者がプログラムを実施し、実践から得たことに加え、情報提供や情報共有、「うんこ」の見せ方の解説を行った。また実際にプログラムを実践し、参加者は「うんこ」と「うんこから見える世界」にとっても釘付けになっていた。

【記録担当者】 高橋 直樹

WS22:体験型ワークショップ(80 分)

自然をフィールドとした父親参加型のわんぱく子育て

実施者:佐野 由輝、長谷川 潤(特定非営利活動法人イクメンクラブ)

【概要】

イクメンクラブは「子どもたちを広く多様な世界に誘いたい」をモットーに様々な活動をしており、特に力を入れているのが、父親が主体的に参画するイクメンキャンプである。本ワークショップでは、現代の家族が抱える様々な問題及びその解決策として自然をフィールドとした子育ての効果について議論するとともに、参加者自身で具体的な企画の立案にチャレンジする。

【実施内容】

イクメンクラブとして大切にしている、①育児を楽しめるカッコいい男、②子どもたちを広く多様な世界へ誘い出す、③妻への愛と心づかいを忘れない の3点とともに活動の紹介があった後、4人1組になり、配布された模造紙に、子育てをする上で「大人をとりまく問題」、「子どもをとりまく問題」を付箋で書き出していった。続いて「自然をフィールドとした子育て企画」に親子で参加したと仮定して、その結果考えられる効果を、「大人に与える効果」と「子どもに与える

効果」に大きく分けて、同様に付箋へ書き出し意見を整理したら、「自然のフィールドで活動するとき、どのような内容で行ったらよいのか」を各グループで考えた。これらの条件を元にテーマやプログラムコンテンツをもう1枚の模造紙に書き込み、全体で発表した。

【まとめ】

イクメンクラブとして確信していることが3つある。「①お父さんたちはチームになることで力を発揮する」「②子どもたちは、自ら遊びを見つけ、仲間とつながる」「③ナナメの関係(異年代)が、スパイスとなり、安定感が増す」。

参加者の意見として印象的なのはお父さんがかっこよく(日常とは違う一面)見えるようなフィールドワークができると良い。例えば、薪割り、火おこし、など。共通する意見として、お父さんはサービスを受ける立場ではなく、主体的に関わることがとても大切であるとまとまった。

【記録担当者】中山 孝志

WS23:体験型ワークショップ(80 分)

既存のプログラムをSDGs ナイズ大作戦！GEMS 編

実施者:鴨川 光、柴原 みどり(ジャパン GEMS センター)

【概要】

すでに展開しているプログラムにSDGsを盛り込み、さらによくしていくワークショップ。1つのリングを地球にみたて、地球上に限られた資源について考えた。

【実施内容】

まず4人1組に分かれ、自己紹介とともに、1枚のA4用紙に海についての思い出を書き、グループ内で発表した。それから海をテーマに1つのリングを地球に置き換え、利用できる資源について理解を深めた。

2人1組になり、各ペアにリング、ナイフ、まな板、紙皿が渡された。各ペアで「陸地」「海」を担当するか決める。陸地担当が先にリングを切る。

リングを使うことにより、とてもわかりやすく地球の資源のことがわかり、地球全体のほんの少ししか使えない土地や

資源を知った参加者はとても驚いており、地球の現状を知ることができた

アクティビティを体験し、資源をどのように使うかをSDGsの17のゴールを考えながら4人グループで意見を出し合った。グループ内では様々な意見が出され、いくつかは全体に発表された。

【まとめ】

本ワークショップでは、地球の資源を可視化し、わかりやすく自分たちが使える資源が限られていることを体感的に理解した。さらにSDGsを踏まえた工夫を加えることによって、もう一步踏み込んで無駄のない資源の使い方を考える機会となった。

【記録担当者】濱崎 竜斗

WS24:体験型ワークショップ(80 分)

SDGs と森里川海、そしてライフスタイル

実施者:環境省「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトチーム

【概要】

環境省が取り組む「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトのコンセプトについて、SDGs と関連づけて解説された。その後は自然の恵みで社会や経済の課題解決、未来につながるライフスタイルなど様々なアイデアをグループごとにディスカッションし、発表した。

【実施内容】

アイスブレイクの後、プロジェクトの紹介があった。「森里川海を豊かに保ち、その恵みを引き出すこと」、「1 人 1 人が森里川海の恵みを支える社会をつくること」を目指す。

また SDGs を経済・社会・生物圏に分けた 3 層構造や、各ゴール同士の関係性、また経済・社会の諸課題の同時解決につなげることが重要である等の解説があった後、グループディスカッションを行った。参加者の生活する地域の良い点や

課題を個人で考え、付箋に書き出す。グループでえんたくんを囲み、それぞれ書き上げた付箋をもとに、課題の解決について議論した。どのグループとも付箋がずらりと並び、盛り上がりを見せた。

話し合った内容は全体に発表し、参加者で共有した。

【まとめ】

「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトの活動や SDGs について、改めて整理して確認することができた。それを踏まえて、自身の活動する地域での課題について、様々な立場の参加者がそれぞれ違った視点や意見やアイデアを持ち合い、話し合いをすることができ、新しい気づきが多くあった様子だった。

【記録担当者】 岡野 由美

WS25:対話型ワークショップ(80 分)

目からウロコ、環境教育のためのミニマム天文基礎講座

実施者:斎藤 透(く月>の会・東京)、中村 照夫

【概要】

天体については時間、空間、文化が人とうどう関わっているかを考え、天文を通じて「つもる時間」の意味を理解した。そして粘土で地球や月を作り、それを元実際に地球、太陽、月の距離を清泉寮の牧草地で体感した。環境教育と天文の結び付きが密接であることを実感する時間となった。

【実施内容】

まず時間、空間、文化を軸に暦の話を行った。天文に苦手意識を持つ参加者が多かったが、わかりやすい説明から苦手意識が薄れていき、暦と人の関係を真剣な表情で聞いていた。私たちの暦は太陽との位置関係で出来ていることを知り、天文を理解することで環境教育の幅が広がることを知った。

続いて星の大きさ、距離はまちまちであること、そして明るさで距離がわかることを知った。さらに星の見方では環境

教育に使える手法を伝授。参加者からは星の見方が変わってくるとい声聞いた。

地球を青色の粘土 1cm、月を黄色の粘土で 3mm を実際に 1 人 1 個ずつ作成した。そして太陽は 1m のレフ版を準備し、地球、太陽、月の距離感を外で体感した。地球を軸に考えると月は 30cm、そして太陽は 120m 離れていることを知り参加者は皆、驚いた様子だった。

【まとめ】

地球、月、太陽の距離間を体感により理解し吸収することで時間、空間、文化がどのように発展していったのかを知ることができた。私たちの生命体は太陽と月に生かされているからこそ環境を語る上で天文は欠かせないものであることを参加者は実感した。まさに目からウロコの時間となった。

【記録担当者】川嶋 晴

WS26:対話型ワークショップ(80 分)

公害と SDGs JEEF・あおぞら財団の協働 FW

実施者:林 美帆(あおぞら財団)

【概要】

前半ではあおぞら財団と JEEF が共同で行う活動を紹介。10 月には学生を集めてフォーラム「公害と SDGs」の事前勉強会を行い、参加した学生たちがフィールドワーク（以下、FW）や語り部と話すといった経験を通して学んだことが紹介された。後半では公害の当事者になりきり、討議をするロールプレイを行った。

【実施内容】

自己紹介とアイスブレイクの後、あおぞら財団と JEEF が協働で取り組む活動として「公害と SDGs～大阪・西淀川から考える～」のフォーラムおよび事前勉強会が紹介された。続いて、市役所職員、記者、被害者の家族、工場経営者、地元の病院の医者、工場労働者の役割でロールプレイを行った。工場の周辺で原因不明の病気が発生し、市役所が原因調査を行ったものの明らかにならなかった、という設定。各役割の

利害関係を考慮し、役になりきって原因が不明な状況でどのように対処すればよいかという難しい問題について考えたが、議論のなかで様々な問題が見えてきた。

ロールプレイの終了後は感じたことをアンケートに書き、共有した。被害者の家族や工場の関係者のそれぞれの立場に被害があり、簡単には結論が出ないことを参加者で確認した。

【まとめ】

公害は過去の話として扱われることが多い。しかし今なお続く問題であり、その解決は非常に難しい。公害は根深い問題と直接向き合い、対話を通じて解決に向かうという点で SDGs につながるところがある。公害教育を進める中で、SDGs が持つ未来から現在を考える視点が重要となっている。

【記録担当者】珠村 智

WS27:体験型ワークショップ(80 分)

一体感を生み出す魔法の技術！アイスブレイク三連発♪

実施者:山田 哲弘(岡山県自然保護センター)

【概要】

コミュニケーションビルディングなどと呼ばれる、ある目的の達成に積極的に関わるよう働きかける技術である「アイスブレイク」を体験するワークショップ。3 つを体験後、参加者の知っているアイスブレイクを紹介し合い、共有した。

【実施内容】

アイスブレイクの意義や目的について実施者から解説があった後、3 つのアイスブレイクが行われた。

1) 環境講座で役立つ！「○○○の間違い探し」

4 人 1 組となり、スズメのイラストを見て実際のスズメとの違いを見つける間違い探し。

2) 伝える！伝わる？「月とうさぎ」

参加者の代表者 1 人が月とうさぎが描かれた絵を渡され、それを言葉だけで他の参加者に伝え、紙に描いてもらう。言葉だけで絵を伝える難しさに、苦戦している様子だった。

3) ネイチャーガイドで役立つ！「変身ゲーム」

実施者が一度隠れ、体のどこかを変えて登場し、何が変わったのかを当てる。参加者は積極的に発言していた。

4) 皆さん教えて♪「○○で役立つ○○」

3 つのアイスブレイクの体験後、2 つのグループに分かれ、参加者が知っているアイスブレイクをそれぞれ共有し、実際に行なった。

【まとめ】

アイスブレイクの目的として参加者の緊張を緩めること、意識を一つの方向に向けることなどがあると冒頭に実施者は述べていた。実際に、参加者は楽しそうにコミュニケーションをとっており、目的が達成されていることが体感された。

【記録担当者】松岡 信吾

音楽フェス×環境教育@清里 超実践体感ワークショップ

実施者:鈴木 幸一(アースガーデン)、村上 友和(株式会社自然教育研究センター)

【概要】

一般にも参加しやすい音楽フェスに、環境教育の要素を加えるとどのようなことができるのか。本年、清里で行った音楽フェス(Hi! Life 八ヶ岳)の紹介後、会場となった場所の環境を体感した。これを踏まえ、さらにどのようなことが出来るかアイデア出しを行った。

【実施内容】

参加者は「音楽」の要素に惹かれて集まったようだった。まずは実施者から Hi! Life 八ヶ岳の当日の様子について解説があった。そのあと会場を室内から、Hi! Life 八ヶ岳の実際の会場「サンメドウズ清里」へ移動した。実施者からステージの場所や向きなどを聞きながら、演奏者とお客様が見た景色を体感した。青空に白い雲が浮かび、遠くには富士山、振り向けば八ヶ岳、周りには南アルプスの山々。時間と共に、また立つ場を少し変えるだけでどんどん変化する景色に参加

者は圧倒されているようだった。

音楽フェスを再び開催する際、さらに何が出来るかを室内に戻って考えた。1人1人、具体的なアイデアを紙に書いて発表した。「お客さんは落ち葉や枝などで楽器を作り、その楽器と風や川の音でその場でしか聴けない音楽作るのはどうか」「様々な方向を向いた客席を設置し、景色をより楽しんでもらおう」「地元(清里)の人と交流ができる場、時間が欲しい」「森で捕獲した鹿を食べ、革細工をし、学びたい」などの清里の自然から文化を活かした様々な案が出た。

【まとめ】

清里の自然を体感することで、ここにしかない雄大な景色とふれあえる自然を再確認し、音楽フェス×環境教育の可能性が広がったワークショップとなった。

【記録担当者】西尾有香音

2 日目 全体会 2「自分×SDGs で次のアクションを考える」

1 日目の全体会 1 や 2 日目の参加者企画ワークショップを経て吸収したものを整理し、次のアクションを生み出していくために、もう一度 SDGs について自分と関連付けながら理解を深める時間とした。自分がすでに関わっている、あるいはこれから始めようと思っている活動を SDGs の枠組みで捉え直し、すでに実践できていることとこれから加えていくことが参加者の中で明確になることをねらいとする。

SDGs の 17 の目標のうち、17 番のゴール（パートナーシップ）を除く 16 番までの解説が書かれた用紙を用意し、参加者は「自分が理解を深めたい SDGs のゴール」を 1 つ選んだ。（※出展：国連広報センター『SDGs シリーズ「なぜ大切か」』）

その上で「えんたくん」を囲み、参加者同士のディスカッションを行った。

ファシリテーター： 公益社団法人日本環境教育フォーラム（JEEF） 鴨川 光



※国連広報センター『SDGs シリーズ「なぜ大切か」』

www.unic.or.jp/news_press/info/24453/

1 周目

なるべく異なるゴールを選んだ参加者同士が同じグループになるよう、5～6 人ずつえんたくんを囲み、1 人ずつ自分が選んだゴールについて、自分事とつなげながら同じグループのメンバーへ端的に紹介を行った。

2 周目

続いて同じゴールを選んだ参加者同士でえんたくんを囲んだ。「自分たちがこのゴールの実現のためにできる活動」について話し合う。ゴールによっては 2 人しかいないグループができたり、同じゴールで複数のグループができたりと、偏りが見られた。

3 周目

はじめのグループに戻り、2 周目のグループで深めてきた情報をグループ内でシェアした。

フリートーク

ここまでの流れを受け、各自がこれから自分の活動の中で強めていきたいエッセンスについて考えた。各グループで出された意見や感想として、下記が発表された。

・繋がりたい人から考える。

SDGs の言葉が認知されていないため、どのようにしたら認知されるかを考えた。そのなかでもりあがったのが「福山雅治と繋がりたい」。NHK でも世界の自然のレポートをしたり、写真を撮ったりしているのでできっと興味はある。父親としての視点もある。子どものためにという地球または自然を守りたいという気持ちもあると推測される。

そういった方に広告塔として立って頂き、興味を引かれた方を受け止めるホームページやメディアを援護射撃として用意しておく。たとえば「マンガでわかる SDGs」など。そういったものも含めて、一気に認知度をあげていくための仕掛けが重要。

・時間が経ってから気づくこともある。

教え子から先日電話があった。朝日新聞に掲載されていた SDGs の記事を読んで、はじめて中学校でやってきたことの意味がわかったと言っていた。これからも続けていきたい。

・問い続けることが大切。

どのゴールを見てもじっくりこなかった。私たちが日本という先進国にいるからかもしれないが、ここを出てくる話はとても豊かだった。そもそも貧困とは何だろう？ など、問うてみることで、問いを思い続けることが大切だという話をした。それぞれの国によって、また立場によって、各ゴールについて捉え方が異なると思う。1 年後、10 年後にまた問い直していければ、2030 年は明るいのではないかな。

ここで答えを出すのではなく、次のステップに向けて踏み出すヒントになればいいと思っている。また、1 グループでは多くても 6 つ程度のゴールの話しかできなかったが、ここから 17 番のゴールの使い時、夜の情報交換会や 3 日目の当日募集ワークショップなど、たくさんの人たちと「パートナーシップ」を使ってさらに話ができることを期待しているとファシリテーターが伝え、全体会 2 は終了した。

3日目 当日募集ワークショップ

2日目の参加者企画ワークショップからの連動企画や、清里ミーティング会期中に出会った参加者同士で「今後」について話し合いをする場、また共通テーマについてもっと掘り下げて話をしたいという場とする時間。

会期中（2日目夜）に実施者を募集する。実施者でない参加者は当日朝までに自身の興味・目的に合わせて参加プログラムを選択し、各ワークショップ会場で参加者同士の活発な意見交換が行われた。

1. GO OUT JAMBOREE ZO18 キッズフィールド作戦会議
2. オイシータノシーサワガシー 焚火を囲む会
3. 環境教育カードゲームを開発
4. KP法のいろいろな使い方
5. AIやシェアリングビジネスの時代の自然学校環境教育って？
6. 若者と一緒に考えるこれからの環境教育
7. 倒れる前に生き方をふりかえろう！～今ここを幸せに生きる技マインドフルネス入門～

◆GO OUT JAMBOREE ZO18 キッズフィールド作戦会議

実施者：鈴木 幸一（アースガーデン）、村上 友和（株式会社自然教育環境センター）

前半は音楽フェスの運営に携わる2人から、環境に配慮した音楽フェスが増えていることなどを紹介した。4月に開催される音楽フェス「GO OUT JAMBOREE」では子どもたちが遊べる「キッズフィールド」を設けており、自然豊かな立地を活かしたイベントを開催している。後半では参加者一人一人がキッズフィールドで実施するイベントのアイデアを出し、班ごとに共有し発表した。

【記録担当者】珠村 智



◆オイシータノシーサワガシー 焚火を囲む会

実施者：坪松 美沙（久志地域交流促進協議会）、古屋 真東（甲斐國一宮浅間神社）、生田香織・谷口哲郎（特定非営利活動法人つがる野自然学校）、山根篤大（環境省）

参加者とともに作ったたき火を囲みながら花炭（松ぼっくりを空き缶に入れ、炭にしたもの）や手作りスコーン、リンゴのホイル焼きなどを作って・食べるワークショップ。花炭用の松ぼっくりを森へ拾いに行くところから始まり、薪に火をつける。参加者は各々が焚火を囲みながら本ワークショップに参加した理由や、清里に来た目的、自己紹介などを話し、ダッチオーブンで焼いたスコーンやリンゴなどに下敷を打ちながら楽しそうに交流をしていた。

【記録担当者】鈴木 奈美



◆環境教育カードゲームを開発

実施者：奥宮 健太（BEANS BEE）

新しい環境教育カードゲームを開発することを目的としたワークショップ。参加者同士で自己紹介を行った後、実施者が開発したカードゲームを体験したうえで、新たなカードゲーム開発についてディスカッションを行なった。キーワードを個人で出した後、その各ワードをグルーピングし、内容を詰めた。ディスカッションはとても盛り上がりしており、切れることなく次々と意見が出されていたのが印象的だった。

【記録担当者】松岡 信吾



◆KP 法のいろいろな使い方

実施者：川嶋 直（公益社団法人日本環境フォーラム）、林 美帆（あおぞら財団）

KP 法の考案者である実施者が、屋外・ポスターセッション等での応用編を紹介。KP 法はプレゼンテーションの手法のひとつとして、プレゼンテーションで大切なポイントや弱点、より伝わるための方法を伝授。ワークショップは実施者を中心に参加者とコミュニケーションをとりながら進められ、適宜質問に答えながら、KP 法とパワーポイントの使い分けについても解説がされた。終始笑顔が絶えず、参加者の積極的な質問が多くみられ、自分の活動の中で積極的に KP 法を取り入れていきたいとの声も出されていた。

【記録担当者】永沢 亮祐



◆AI やシェアリングビジネスの時代の自然学校環境教育って？

実施者：森 雅浩（有限会社ビーネイチャー）、小林 莉沙（トヨタ自動車株式会社）

AI（人工知能）・VR（バーチャルリアリティ）・シェアリングエコノミー等、現代社会で広がりを見せている。実施者による独自の見解や解説を交えながら、実際に Airbnb（宿泊施設・民宿を貸し出す人向けのウェブサイト）やメルカリ（フリマアプリ）などを見てディスカッションを行った。VR 等の最先端機器等が自然学校の行う環境教育に今後どのように取り入れられていくのか、その可能性についても活発的な議論がされた。

【記録担当者】伊藤 直道



◆若者と一緒に考えるこれからの環境教育

実施者：片山 裕美子（酪農学園大学大学院）、澤田 雄喜（公益財団法人京都市環境保全活動推進協会）

SDGs ひとつ目のゴール：貧困について「あなたが描く環境教育の未来とは」というテーマを立てた。参加者は紙にそれぞれキーワードを書いた。「日本が環境教育先進国になればいい」「環境教育という仕事が憧れの職業になればいい」「環境に優しい態度が当たり前になっているといい」「自然との距離が身近であるといい」「環境教育という市場が確保されるといい」などの意見が出された。そして今の課題として、たくさんの人を巻き込むためにはどうしたらいいか議論をした。ミーティングの回数や資格の取得で自信を付ける、情報発信に工夫をするなどの意見が出された。

【記録担当者】吉田 直哉



◆倒れる前に生き方をふりかえろう！～今ここを幸せに生きる技マインドフルネス入門～

実施者：中野 民夫（国立大学法人東京工業大学）、菅山 亜美（NHK エンタープライズ）、大野 さゆり（ESD Youth Japan）

ベランダへ出て「体を整える」ワーク、室内にて「呼吸を意識する」ワーク、マインドフルネスの説明、効果の解説、実施者の体験の語り、参加者の気持ちのシェアを行った。

誰もが未来や過去の不安を持っているが、それを取り放し、「今ここ、今この瞬間」を見つめ、ありのままの自分を評価せずに、ただ受け入れ感じる事がマインドフルネスであり、それによって生き方に変化がもたらされる。今までマインドフルネスを体験したことがない人でも、その世界に触れることができるワークショップだった。

【記録担当者】鈴木 佑実



3 日目 全体会 3「全員参加型ディスカッション～SDGs でつくる私のアクション～」

3 日間をふりかえるとともに、それを踏まえ、すでに展開されている自身の活動や組織の在り方をもう一步進めるために得たヒントをまとめることがねらい。

全体会 3 は椅子を 4 重の円に並べたフィッシュボウル形式で実施した。テーマは「SDGs を疑え！真の理解、真の行動のために」。4 重円の中心の席は空けておき、発言したい人はその席に座り、マイクの順番を待つ。中心円の中央にはえんたくんを置き、出された意見が書き込んでゆく。（＝グラフィックレコーディング）また、発言者の様子やグラフィックレコーディングは正面のスクリーンに映写され、離れた席の参加者も見ることができた。議論の後、「SDGs 私なりの次の一步」を 1 人ずつ書き出した。

最後に、環境省環境教育推進室室長の永見靖氏から自身の「次の一步」の表明と 3 日間の感想を交えて挨拶を頂き、全体会 3 は終了した。

ファシリテーター：東京工業大学／公益社団法人日本環境教育フォーラム理事 中野 民夫
ファシリテーション・グラフィック：ESD Youth Japan 大野 さゆり

挨拶： 環境省環境教育推進室室長 永見 靖



出された意見は、以下の通り。



SDGs の疑問

- ・ SDGs はよく出来た提言・目標だと思うが、それをこれからどう機能させていくかが重要。
- ・ 言葉がわかると理解したような気持ちになる。具体的に落としていかなければと思う。
- ・ 2 日目のワークショップで、SDGs は数字で達成率などが出されているが、環境教育も含め数値で測れないものも多くある。個にスポットを当てて、一人一人に目を向けて社会のことを考えていくことが一步。SDGs を疑ったのは、資本主義の数字で測っていくこと。一人一人に向き合った考え方で進めていかないとうまくいかないのではないか。
- ・ ターゲットをひとつずつ見ていくと、疑問が湧いてきた。同意をするために妥協した印象。企業が動いてくれるのは大きな動きになるだろうが、都合のいいことだけとられて大義名分になってしまって、環境教育をやってきた人たちはそこをしっかりと見張っていかなければいけない。
- ・ ターゲットを読み込んで、「すべての人」「あらゆる場所で」と意識して書かれていることに気づいた。一見よいことだが、先進国の視点で書かれていると思うことが多々あった。「途上国は先進国に追いつくことが目標」を前提にまとめたものという印象。すべての人にあてはめることが本当に必要なのか。

SDGs 達成のために

- ・ 懇親会で、SDGs を多くの人に知ってもらわなければいけないことを前提に話をしていたが、キーマンが仕組みを知っていれば、名前（言葉）を知らせることはないのでは。
- ・ SDGs を中心にすることで危うさがあるのでは。すでに多くの人が認識していることを SDGs にマッピングしてさらに推進されていくものと、一方で、まだフォーカスされておらず取り残されてしまうものが出てくる。日本でも貧困なら奨学金問題や非正規雇用問題など。取りこぼさないために、どのような課題があるかシェアを広げていく、どのようにしたら取りこぼさな

いかな議論が必要。

・語源を考えると、「開発」は「そこにあるものを開くこと」。環境教育、ESDに関わっている人たちでもSDGsを自分事にするのは難しいなら、一般の人にはもっと難しい。それを一緒に考えることがパートナーシップであり、ESDではないか。

・「資本主義」や「民主主義」によって達成されている豊かさに対しての見直しがなく、何となく語られるのは違う。それによって今の自分が守られていることを、自覚しなければならない。これまでの成果としてみた上で、SDGsを考えたほうがいい。



「豊かさ」とは何か

・途上国で出会った子どもたちはとても笑顔だった。「貧困」なのは自分の心の方ではないかと、その時に思った。

・イギリスの貧困をテーマにした映画「わたしは、ダニエル・ブレイク」(ケン・ローチ)を観て、違和感があった。2日目の全体会で、日本は地域に豊かさが残っているという話をした。

・マインドフルネスのワークショップで、一人一人が心の変容・今の自分を見つめることが豊かさのひとつではと気づいた。本当の幸せは何か、自分に問いかけることがSDGs。

・「先進国」「途上国」という言葉がなくなることがゴールなのではないか。

「私」にとってのSDGs

・今回のミーティングのタイトルが「SDGsでつくる私のアクション」。まず私が大事にしたいものを大事にすることが大切。都市の便利さの恩恵も受けているし、お金も欲しい。無理をしながら続けていくことは難しい。自分にとっての豊かさ、幸せを定義し、生活にとりこんでいくかたちが望ましいのでは。「私」をSDGsに合わせるのではなく、私なりに出来るように各ターゲットを具体的に考えることが大事。

・全体会1でSDGsについて知ったが、3日間参加して、今でもピンと来ていない。SDGsは統一された見解のもので考えると素晴らしいものだが、個人の価値観が含まれてしまうと良さが崩れてしまう。「私」がどうできるか考えられず、モヤモヤしている。

・SDGsは身近に感じられないが、17のテーマの中で、1つくらいは自分の中で切実なテーマがあると思う。そこに対してのこだわりを持つと、おのずと自分の役割が見えてくる。

・SDGsが組織や集団で考えるにはいいものだが、個人の生活に当てはめると本当に自分が幸せになれるのかは疑問。



3 日目 閉会式

閉会式

司会・閉会挨拶： 公益社団法人日本環境教育フォーラム（JEEF） 理事長 川嶋 直

最後に、（公社）日本環境教育フォーラム理事長・川嶋直より閉会の挨拶と来年度の開催日程の発表があった後、外に出て会場である清泉寮を背景に記念写真を取り、清里ミーティング2017は終了した。



オプション

◆協賛企業ブース

清里ミーティングへご協賛いただいた企業様の紹介ブースを設置。



◆自由配布コーナー

参加者が自由にチラシやパンフレットを設置できるコーナーを設けた。



◆顔写真名簿

参加者が会いたい人を探せるよう、全参加者の顔写真を掲示。夜の情報交換会では、JEEF 理事が会いたい人を紹介してくれるコンシェルジュデスクを設けた。



◆リクルートコーナー

求人情報・求職情報を自由に貼り出せるコーナーを設置し、夜の情報交換会ではマッチングタイムを設けた。



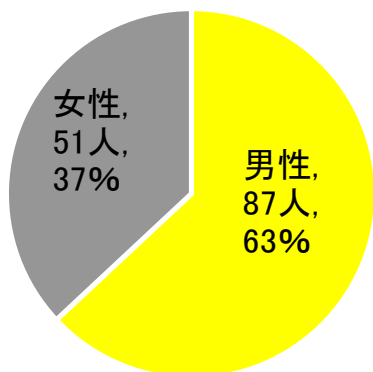
◆フォーラムショップ

環境教育に関する教材・図書、グッズなどの販売が行われた。

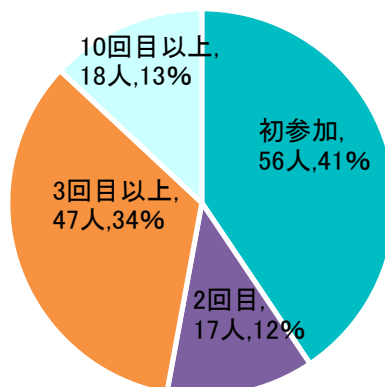


参加者データ ～ データに見る清里ミーティング 2017 ～

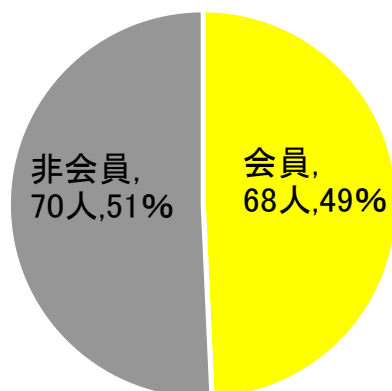
性別



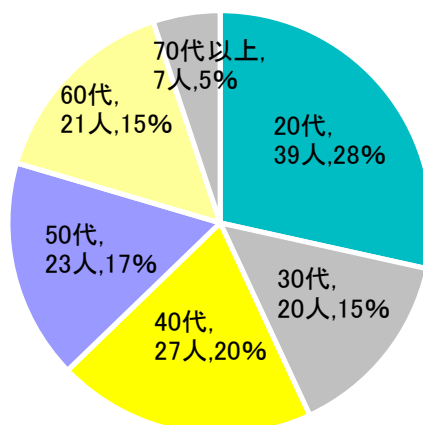
参加回数



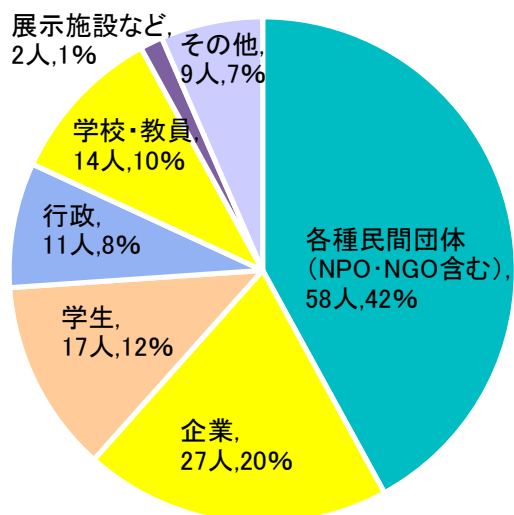
(公社)日本環境教育フォーラム
会員



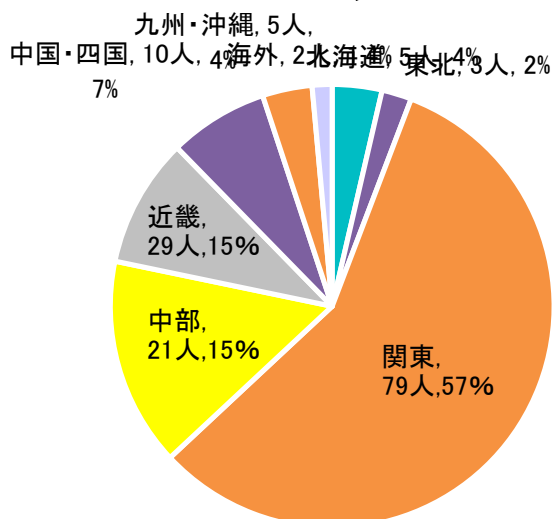
年齢



属性



地域



スタッフ名簿

瀬尾 隆史	(公社) 日本環境教育フォーラム
京極 徹	(公社) 日本環境教育フォーラム
柴原 みどり	(公社) 日本環境教育フォーラム
垂水 恵美子	(公社) 日本環境教育フォーラム
鴨川 光	(公社) 日本環境教育フォーラム
加藤 超大	(公社) 日本環境教育フォーラム
饗場 葉留果	(公財) キープ協会
石川 昌稔	(公財) キープ協会
岩渕 真奈美	(公財) キープ協会
江崎 淳一	(公財) キープ協会
岡野 由美	(公財) キープ協会
小野 明子	(公財) キープ協会
川村 悦子	(公財) キープ協会
坂川 実基	(公財) キープ協会
齋藤 園子	(公財) キープ協会
佐藤 陽介	(公財) キープ協会
関根 健吾	(公財) キープ協会
高木 恭子	(公財) キープ協会
瀧上 舞	(公財) キープ協会
田村 のり子	(公財) キープ協会
鳥屋尾 健	(公財) キープ協会
中山 孝志	(公財) キープ協会
西尾 有香音	(公財) キープ協会
本田 晶	(公財) キープ協会
村井 孝一	(公財) キープ協会
柳川 真澄	(公財) キープ協会
村山 敬洋	(一社) 地域 ESD 事務所つむぐ

ボランティアスタッフ名簿

(五十音順)

伊藤 直道	立教大学社会学部
岩本 彩夏	文教大学
川嶋 晴	日本女子体育大学
佐藤 琢磨	都留文科大学社会学部
鈴木 奈美	立教大学社会学部
鈴木 佑実	南山大学人文学部心理人間学科
高橋 直樹	芝浦工業大学大学院
球村 智	立教大学社会学部
永沢 亮祐	中央大学総合政策学部
濱崎 竜斗	
松岡 信吾	立教大学社会学部
山口 恭平	立教大学社会学部
吉田 直哉	麻布大学生命・環境科学部



清里ミーティング 2017 を支えてくれたボランティア
スタッフの皆さん、ありがとうございました！

清里ミーティングこれまでの実績

第1回清里フォーラム

- 日時：1987年9月28日(月)～29日(火)
- 参加人数：93人
- 主催：清里フォーラム実行委員会
- 【分科会】①環境教育について（考え方とその論理）
②自然観察の中に今後とこんでいきたいもの
③指導者とボランティアの養成を今後どうするか
④施設運営とコーディネーターの在り方について
⑤自然観察の有料化について
⑥清里フォーラムの将来性・方向性について
- ゲスト：加藤幸子（小池しぜんの子）

第2回清里環境教育フォーラム

- 日時：1988年11月13日(日)～15日(火)
- 参加人数：151人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会／(財)日本環境協会
- 後援：環境庁／山梨県
- 【分科会】
前半 ①学校と環境教育 後半 ①地域・開発と環境教育
②地域社会と環境教育 ②施設と環境教育
③施設と環境教育 ③人づくりと環境教育
④自然観察と環境教育 ④市民・行政・企業・学校の協力
⑤企業と環境教育 ⑤環境教育の目的と方法
⑥学校と環境教育
⑦企業と環境教育
- ゲスト：ロバート・ピナウィーズ（元ヨセミテ国立公園管理事務所長）

第3回清里環境教育フォーラム

- 日時：1989年11月12日(日)～14日(火)
- 参加人数：168人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会／(財)日本環境協会
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】①小中高における環境教育カリキュラム
②若い世代に楽しいプログラムとは
③環境教育をうまく経営していくためには
④環境教育の場でボランティアが活躍できるためには
⑤環境教育で村おこしができるか
⑥大学における環境教育
- ゲスト：ジェームス・サノ（元マリン・ディスカバリーズ専務理事）

第4回清里環境教育フォーラム

- 日時：1990年11月18日(日)～20日(火)
- 参加人数：163人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会／(財)日本環境協会
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】①学校教育 ②事業化
③プログラム ④人づくり
⑤施設 ⑥地域開発・村おこし
- ※この年4月より上記6つの研究部会が発足。
- ゲスト：ジョセフ・コーネル（ネイチャーゲーム考案者）

第5回清里環境教育フォーラム

- 日時：1991年11月17日(日)～19日(火)
- 参加人数：187人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】①学校 ②事業化 ③プログラム
④人づくり ⑤施設 ⑥地域社会
- ゲスト：スティーブン・モデル（ヨセミテ・アソシエーション会長）

*1992年9月 任意団体 日本環境教育フォーラム発足

*1992年7月 「日本型環境教育の提案」発刊

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '92(通算6回)

- 日時：1992年9月19日(土)～21日(月)
- 参加人数：132人
- 主催：日本環境教育フォーラム設立準備会
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【紹介WS】①エコツアー報告・ヨセミテ自然学校
②New School of Conservationにおける環境教育
③ベンギンリザープ活動報告
④国際理解教育・資料情報センター活動紹介
⑤フィールドミュージアムごっこ
⑥環境教育国際セミナーに参加して
⑦成城学園における「散歩」「遊び」
- 【体験WS】①さあ、みんなでやってみよう！開発教育シミュレーション
②エコロジーキャンプつまみぐいハイク
③ネイチャーゲーム入門
④もしフィールドでけがをしたら
⑤PLTプログラムの紹介
- 【分科会】①学校での環境教育
②地域に根ざした環境教育
③エコツーリズムの可能性とその問題点
④環境教育のプログラム教材開発
⑤指導者養成について
⑥エコマネジメントのしかた

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '93(通算7回)

- 日時：1993年11月14日(日)～16日(火)
- 参加人数：154人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【体験PRG】①ネイチャーゲーム ②死の準備教育の試み
③マインドクロッキー④パートナーシップへの挑戦
⑤究極の自然観察会 ⑥たずね鳥をさがせ
- 【分科会】①プログラム ②施設 ③学校
④人づくり ⑤企業 ⑥地域・自治体
⑦エコツーリズム ⑧海外の国立公園情報
- ゲスト：アン・ロベッタ（ストーリーテラー）

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '94(通算8回)

- 日時：1994年11月27日(日)～29日(火)
- 参加人数：167人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【体験PRG】①ネイチャーゲーム ②ファイブ・トリック
③森の宝箱をつくろう ④地球救出作戦
⑤枯れ木に花を咲かせましょう ⑥清里・冬物語
- 【分科会】①企業 ②エコツーリズム ③都市環境教育 ④ネイチャー
トレイル ⑤自然学校
⑥ネイチャーライティング ⑦フォーラム塾
- ゲスト：ジョン・エルダー（ミドルベリー大学英語学・環境学教授）

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '95(通算9回)

- 日時：1995年11月25日(土)～27日(月)
- 参加人数：185人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】①自然学校としての施設づくり②行政・自然学校
③自然学校の経営を考える ④自然学校の人材育成
⑤自然学校のプログラム
- 【WS】①写真で環境教育 ②あなたにとって出会いとは何ですか
③環境教育を企画・プロデュースする
④ソフトクリーム姉ちゃんをねええ！
⑤未知なる可能性を求めて
⑥キープ・フォレスト・スクールのプログラム体験
⑦ネイチャーゲーム、アジアと環境教育
⑧独特な日本人に有効な環境教育戦略は？
⑨アース・アート ⑩メディアワークショップ

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '96(通算10回)

- 日時：1996年11月16日(土)～18日(月)
- 参加人数：174人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】①自然学校の「事業化」
②自然学校でのプログラム
③地域振興と環境教育
④環境保全活動がそのまま環境教育
⑤エコツーリズムの様々な可能性
⑥JEEFの法人化など今後の可能性

- 【ワークショップ】
①ネイチャーゲーム入門講座
②ネイチャーエクスポアリング
③清里での川の環境教育を考える
④「子供であそぼう」についての御紹介
⑤元気がでる自然観察
⑥環境教育の本質を考える
⑦環境教育を企画・プロデュースする
⑧清里で「海の環境教育」を考えよう
⑨自然をテーマにしたスライドショー
⑩自分への気づきとNGO
⑪清里インターネット通信社へようこそ
⑫森だくさんの自然体験
⑬まちを遊ぼう
⑭未知なる可能性を求めて
⑮エコビレッジを作ろう
⑯アクティビティの「バクリとアレンジやローカライズ」

※1997年4月

環境庁主管の法人格を取得、社団法人日本環境教育フォーラム設立

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '97(通算11回)

- 日時：1997年11月15日(土)～17日(月)
- 参加人数：170人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】①環境教育の指導者養成
②環境教育の新しいプログラム開発
③環境教育とまちづくり
④環境教育の情報の発掘と提供
⑤企業や行政とどのように組むのか？
⑥新しい交流集会のスタイル
- 【WS】①ネイチャーゲーム入門講座
②自然と心・心とひとのコミュニケーション
③環境教育の服装計画を考える
④出たとこ勝負の自然観察会+人間ウォッチング
⑤環境教育を企画プロデュースする

- ⑥環境教育と経営と税金
- ⑦インタープリティブサインをつくらう
- ⑧ディープエコロジー・ミニワークショップ
- ⑨フィリピン流！演劇ワークショップのすすめ
- ⑩安全管理チェックリストをつくってみよう
- ⑪ネイチャーエクスポアリングコースづくり
- ⑫水辺でさがすいろいろなつながり
- ⑬アクティビティと小道具
- ⑭キープの自然体験プログラム
- ⑮博物館をつくらう！
- ⑯野外における企業研修の実践とその可能性

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '98(通算 12 回)

- 日時：1998 年 11 月 14 日(土)～16 日(月)
- 参加人数：176 人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境庁／文部省／林野庁／山梨県
- 【分科会】
 - ①公共事業における環境教育の役割
 - ②森林・里山における環境教育と地域振興
 - ③アメリカの環境教育プログラムの日本への導入
 - ④動物と関わる環境教育
 - ⑤日本型エコツーリズムについて
 - ⑥メディアと環境、その先にあるもの
- 【ワークショップ】
 - ①環境教育個人商店を考える
 - ②私のきもち、みんなのきもち、地球のきもち
 - ③21 世紀のインタープリテーションを求めて
 - ④おきらく やまんの部屋
 - ⑤プロジェクトワイルド「水生生物」に学ぶ
 - ⑥エコマネーのすすめ
 - ⑦もし参加者が野外でケガをしたら
 - ⑧ネイチャーエクスポアリング
 - ⑨エコスピリチュアルワークの試み
 - ⑩アクティビティ大賞実施編・体験編
 - ⑪これまでの 50 年とこれからの 50 年
 - ⑫川を設計してみよう
 - ⑬「おもい」を「かたち」にはじめの一步
 - ⑭自然学校でめしが喰えるか

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '99(通算 13 回)

- テーマ：「学ぶ心・育つ力」
- 日時：1999 年 11 月 13 日(土)～15 日(月)
- 参加人数：185 人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境庁／文部省／林野庁／山梨県
- 【分科会】
 - ①自然学校の運営を考える
 - ②「総合的な学習の時間」で学校と地域をつなぐ
 - ③都市型の生活環境をテーマにした遊び場づくり
 - ④森から見つめる川と海
 - ⑤エコツーリズム一歩前へ
 - ⑥見つめよう地域の里山、伝えよう里山の魅力
 - ⑦チルデンを越えろ！
 - ⑧教育を考える
- 【早朝 WS】
 - ①カラスのきもち
 - ②朝のディーツァイム
 - ③きもちとキモチをつないだら
 - ④五感で感じよう清里の自然
 - ⑤オカリナ・ハナリナ体験教室

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2000(通算 14 回)

- テーマ：「原点を見つめよう」
- 日時：2000 年 11 月 11 日(土)～20 日(月)
- 参加人数：171 人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境庁／文部省／林野庁／山梨県
- 【体験 PRG】
 - ①野外での救急法を覚えよう
 - ②ネイチャーウォッチング in 清里
 - ③清里の晩秋を味わうキープ流自然体験
 - ④心と体で感じよう！ネイチャーゲームが案内する清里の自然
 - ⑤竹を使ったものづくり
 - ⑥羊の毛から糸つむぎ教室
 - ⑦自分という自然に出会う
 - ⑧Frog (カエル)
 - ⑨プロジェクト・アドベンチャー
- 【分科会】
 - ①自然体験活動における体験学習法
 - ②ゆったり楽しむ ノスタルジーワーク
 - ③虫を知る・入門
 - ④「センス・オブ・ワンダー」って何だ？
 - ⑤学校ピオトープの可能性
 - ⑥五感を使って楽しみながら自然探検
 - ⑦環境教育とスピリチュアリティ
 - ⑧企業・行政マン向け環境教育テキスト作り
 - ⑨自然学校の PR 活動を考える
 - ⑩Out of Treasure Boxes
 - ⑪民話・ことわざから考える日本人と川の関係
 - ⑫エコツーリズムのビジネスネットワークを考える
 - ⑬表現を楽しもう！「シアターゲーム」
- 【早朝 WS】
 - ①野遊び手遊び発見隊
 - ②センス・オブ・ワンダーの体験

- ③地球と私の合作づくり “1 枚の葉”
- ④見て、聴いて、感じて・・・朝の森でネイチャーゲーム
- ⑤早朝ジョギングワークショップ
- ⑥キモチときもちをつないだら

- スライドプレゼンテーション
- JEEF 理事による 3 分トーク

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2001(通算 15 回)

- 日時：2001 年 11 月 17 日(土)～19 日(月)
- 参加人数：192 人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／農林水産省／林野庁／山梨県
- 【体験 PRG】
 - ①清里の晩秋を味わうキープ流自然体験
 - ②初心者歓迎！清里の自然をネイチャーゲームで楽しもう
 - ③秋の味覚を楽しもう！
 - ④「ほっ♪」となるたき火講座
 - ⑤身体感覚講座
 - ⑥The Bear (ひぐまの生き方、暮らし方)
 - ⑦プロジェクト・アドベンチャー
 - ⑧やまねミュージアムへ行こう
- 【分科会】
 - ①総合的な学習の教材として「拾ったもの(生きもの)に関連するもの」を活用する
 - ②「いまどき」の子ども・「いまどき」の親 改造計画！
 - ③博覧会を環境教育という視点から評価する
 - ④ゆったり過ごすやまね流ネイチャーワーク
 - ⑤ワークショップという新しい学び方をめぐって
 - ⑥朝からイキナリ！若者で語ろう！の会
 - ⑦小さな子どものための環境教育の“技”をさぐる
 - ⑧地域の昔話を中心にした環境教育
 - ⑨農業と林業を語ろう！農業者と林業者と語る環境教育
 - ⑩Environmental Education in English
 - ⑪北九州博、きら博で行われた環境教育プログラムはこれだ！
 - ⑫テロ・戦争に関してわかしあう
 - ⑬環境教育基礎講座
 - ⑭GEMS の体験プログラム
 - ⑮自然学校で働くこと
 - ⑯センス・オブ・ワンダー
 - ⑰ネイチャーエクスポアリングライトの体験と総合的な学習の時間に活かせる活動事例
 - ⑱田んぼから生まれる日本型環境教育
- 【早朝 WS】
 - ①センス・オブ・ワンダーを楽しむ
 - ②早朝ジョギングワークショップ
 - スライドプレゼンテーション
 - 参加者による 3 分トーク「ここが変だよ！環境教育」

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2002(通算 16 回)

- テーマ：「胎動」
- 日時：2002 年 11 月 16 日(土)～18 日(月)
- 参加人数：182 人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／林野庁／山梨県
- 環境教育ミニレクチャー
- ヨハネスブルグ・サミット報告
- 参加者による 3 分トーク「環境教育 次のキーワードはこれ!!」
- 【ワークショップ】
 - ①地域通貨ってなんだろう？
 - ②折り紙を使った環境教育の試み(3)
 - ③幼稚園、保育園に環境教育を導入しよう
 - ④環境問題、エコロジカルアートからの試み
 - ⑤環境教育指導者と研究者、カリキュラム開発者のつながりを作ろう
 - ⑥体験主義を超えて・・・プロジェクト・ワイルドの世界
 - ⑦「自然の中で働く男性はオパチャン度が高い??」を証明したい!!
 - ⑧未来へ、世界へ、感動をどうつなぐのか
 - ⑨ひよこのキモチ
 - ⑩モアイは何を見たか
 - ⑪Environmental Education in English
 - ⑫持続可能な開発と環境教育
 - ⑬森の交響サイン計画づくり
 - ⑭サロンの語り場
- 【早朝 WS】
 - ①早朝ジョギングワークショップ
 - ②清里ミニガイドツアーA
 - ③清里ミニガイドツアーB
 - ④モンゴル茶で朝を迎えよう
 - ⑤清里ミニガイドツアーC
- スライドプレゼンテーション

(社)日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2003(通算 17 回)

- キーワード：持続可能な開発のための教育
- 日時：2003 年 11 月 15 日(土)～17 日(月)
- 参加人数：208 人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／林野庁／山梨県
- 【全体会】
 - ・科学と環境教育をつなぐミーティング（前夜祭）の報告
 - ・環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律

- ・持続可能な開発のための教育（ESD）
- ・スライド&トーク　ーオロニーの日々ー

【WS&体験 PRG】

- ①ワラっていいとも
- ②社会教育ゲーム体験プログラム 投資意志決定ゲーム Chemical
- ③参加型オンラインデータベースを使った「つながる」体験活動の試み/AM
- ④総合学習への NPO 参画が期待されているけど、実現が難しいのは何故？
- ⑤エコ・ネイションゲーム
- ⑥忙しい!!! けど前向きに レベルアップシートを作ろう
- ⑦科学するココロを育てよう！
- ⑧参加型オンラインデータベースを使った「つながる」体験活動の試み/PM
- ⑨野生生物教育の現状と課題
- ⑩フォーラム企業部会をリセットして、今後の方向性を考えよう！
- ⑪「持続可能な人」づくり
- ⑫開府 400 年！ 江戸町民の循環型社会から学ぶごみ減量大作戦
- ⑬どうなる？どうする？ 日本環境教育フォーラムの未来
- ⑭子育てという環境
- ⑮地方発！食農発信！
- ⑯環境教育の中の行政の役割を考えよう！

【早朝 WS】

- ①センス・オブ・ワンダー
- ②清里ミニガイドツアー 富士山とせせらぎの小径コース
- ③清里ミニガイドツアー めしの木コース
- スライドプレゼンテーション

【社】日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2004(通算 18 回)

- キーワード：「持続可能な開発のための教育の 10 年」夜明け前
- 日時：2004 年 11 月 13 日(土)～15 日(月)
- 参加人数：187 人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／林野庁／山梨県
- 【全体会】
 - ・「持続可能な開発のための教育の 10 年」夜明け前
 - ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」を考える

【WS&体験 PRG】

- ①エコツーリズムという生き方
- ②科学と環境教育
- ③地場産小麦でパンをつくらう！
- ④環境立国 エコ・ネイションゲーム
- ⑤「センス・オブ・ワンダーからグリーンコンシューマーへ」
～第 1 回清里「エコ商品コンテスト」～
- ⑥持続可能な地域づくりにつながるネイチャーゲーム体験
- ⑦体験学習への扉をひらく(午前の部)
- ⑧自然学校の動きと人材養成
- ⑨環境教育 in 国際協力 最前線！
- ⑩環境教育基礎講座「環境教育と自然体験」
- ⑪酵母を育てて、パンを作ろう！
～酵母が教えてくれる、命、自然とのつながり～
- ⑫石器時代に接近！モノはこうして作る ～シエラカップ～
- ⑬いのちを伝える自然体験
～自分流健康な生きかたを学ぶ～
- ⑭ボードゲーム型の環境教育プログラム
- ⑮体験学習への扉をひらく(午後の部)
- ⑯「1 億円のプロデュース」

【特別ワークショップ】

- バーム油のはなし ～開発教育入門講座～

【早朝 WS】

- ①早朝ジョギングワークショップ
- ②センス・オブ・ワンダーって、こんなに楽しく気持ちいい
- ③清里ミニガイドツアー めしの木コース
- スライドプレゼンテーション・5 分で伝えるメッセージスライド
- JEEF 公開理事対談

【社】日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2005(通算 19 回)

- キーワード：「自然を舞台にした環境教育は、持続可能な社会作りに具体的にどのよう役に立ってきたのか」
- 日時：2005 年 11 月 19 日(土)～21 日(月)
- 参加人数：221 人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／経済産業省／林野庁／山梨県／日本環境教育学会
- 全体会：基調講演、5 分間スピーチ、パネルディスカッション
- 【WS&体験 PRG】
- ①環境教育基礎講座(午前の部)
- ②自然学校って何だ？
- ③学校教育と環境教育
- ④ボードゲーム型の環境教育プログラム
- ⑤ひとりひとりの感性で自然を感じよう
～ネイチャーゲームでのんびりぶらぶら～
- ⑥セルフガイドシートを使用した、短時間、多人数対象プログラムの検証 ～セルフガイド
シートの評価軸を作ろう～
- ⑦科学ってなんだろうと考えながら皆で遊ぼう！
～低学年向けの GEMS プログラムを通して～
- ⑧森林療法
- ⑨プロジェクト WET 体験会(午前の部)
- ⑩環境教育基礎講座(午後の部)
- ⑪自然学校の評価に向けた人材養成
- ⑫小さな町村での自然学校の役割と可能性を探る
- ⑬CSR と環境教育
- ⑭おいしく食べ続けていける社会づくりは……
- ⑮里山で音楽会

- ⑯樹木年輪から樹の声を聴く方法！ ～過去からの環境の変化を迎える～
- ⑰プロジェクト WET 体験会(午後の部)
- ⑱科学と環境教育 見直そう！あなたのインタープリテーション
～持続可能な社会づくりに自然科学知を活かすために～

- 【早朝 WS】 ①早朝ジョギングワークショップ
- ②座禅&ヨガ
- ③清里ミニガイドツアー

- スライドプレゼンテーション・5 分で伝えるメッセージスライド
- JEEF 活動報告

【社】日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2006(通算 20 回)

- 日時：2006 年 11 月 18 日(土)～20 日(月)
- 参加人数：224 人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／経済産業省／林野庁／山梨県／日本環境教育学会
- 全体会「日本の環境教育 この 20 年を振り返る」基調講演
- 学長鼎談「大学と環境教育」

【WS&体験 PRG】

- ①自然学校を事業化する
～20 年間に自然学校は何を獲得したのか～
- ②団体・組織におけるリスクマネジメントを考える
- ③あなたにとって食育ってなに？
- ④環境教育基礎講座
- ⑤新型の起業研修を応用したスタッフ研修ゲーム
- ⑥学びとコミュニケーション
～GEMS プログラムの体験を通して～
- ⑦ESD の実践のポイントを探る
～みんなで話せばわかってくる!?～
- ⑧森林環境教育のすすめ ～木が好きになるプログラム～
- ⑨50 分プレゼンテーション(午前の部)
- ⑩企業と NPO との協働を考える戦略会議
- ⑪環境教育と ESD(持続可能な開発のための教育)の関係性を探る
- ⑫環境教育と地域づくり
- ⑬環境教育仕事塾
- ⑭行政との連携を考える
- ⑮太鼓で太古に退行するぞ！
- ⑯木から樹を知る方法 ～木材を IP にいかす～
- ⑰セルフガイドで使えるしかけ展示のモデルをつくらう
- ⑱50 分プレゼンテーション(午後の部)
- ⑲自然への感動を生み出し、ライフスタイルの転換を促す
科学的知識の伝え方
- ⑳感性？科学？どっちのインタープリテーションショー

- 【早朝 WS】 ①早朝ジョギングワークショップ
- ②環境質問 ～答えのない問題～
- ③ロシアからやってきた冬鳥を探してみませんか
- ④清里ミニガイドツアー
- ⑤清泉寮 朝さんば

- 環境ショート映像作品上映会

- 今後の戦略会議

- スライドプレゼンテーション

【社】日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2007(通算 21 回)

- 日時：2007 年 11 月 17 日(土)～19 日(月)
- 参加人数：230 人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／経済産業省／林野庁／山梨県／日本環境教育学会
- 省庁プレゼンテーション
- 全体会：「生物多様性」基調講演
・第 3 次生物多様性国家戦略が目指すもの
・企業が取り組む生物多様性保全

【ワークショップ】

- ①「生物多様性」の見つけ方・伝え方
～自然体験活動を、生物多様性保護の教育活動に結びつける実際の方法～
- ②行政との協働を考える
- ③学ぶ環境としてのコミュニケーション ～GEMS とボードメソッド～
- ④食育コミュニティをつくらう！
- ⑤どこでもインタープリテーション！ ～グッズ展開型 IP～
- ⑥関西発！これからは日本的でいいこう！
- ⑦新型の企業研修を応用したスタッフ研修ゲーム
スピード・ソリューション～自然学校版～
- ⑧企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える
- ⑨ツリークライミング？ 樹上の世界から学ぶこと
- ⑩50 分プレゼンテーション
- ⑪企業と環境 NPO との協働を進める戦略会議
- ⑫ESD を広める人のための「ESD 入門講座」
- ⑬環境教育基礎講座
- ⑭生物多様性と環境教育について
- ⑮科学と環境教育 自然体験からライフスタイルの転換へ
～ヤマネのプログラム体験を通じて～
- ⑯メディアと自然学校
- ⑰環境経営戦略ゲーム体験会
- ⑱体験型展示物を評価しよう
- ⑲エコツーリスト予備軍を探せ・つかめ・そして楽しめ！
- ⑳障害者と共に楽しみ・学ぶ森林環境教育
- ㉑やってみよう!! 体感ツリークライミング㉒の世界
- 【早朝 WS】 ①早朝ジョギングワークショップ
- ②センス・オブ・ワンダーを楽しむ散歩
- ③清里ミニガイドツアー

- 今が旬の活動事例紹介
- スライドプレゼンテーション
- 今後の戦略会議
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

(社)日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2008(通算 22 回)

- 日時：2008 年 11 月 15 日(土)～17 日(月)
- 参加人数：192 人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／経済産業省／林野庁／山梨県／日本環境教育学会
- 全体会：「日本型環境教育の知恵 出版記念」
～日本型環境教育とは～
- 【ワークショップ】
 - ①科学と環境教育 ヤマネに学ぶエコロジカルな暮らし方
 - ②生き物との共生について ～どんな共生があるのか～
 - ③環境教育&ESD を” 広げる×深める” 政策を考えよう
 - ④お互いの関係を作るコミュニケーションスキル
 - ⑤社会人大学院生&興味ある人集まれ！
 - ⑥エコとエネをつなぐ環境教育を考える
 - ⑦森林環境教育と Project Learning Tree
 - ⑧環境教育を評価する「環境教育を棚卸しましょう」
 - ⑨企業・NPO・学校の連携による環境教育を考える
 - ⑩企業のための環境 NPO カタログ編集会議
 - ⑪どうする!《限界集落》またの名は《上流社会》
 - ⑫科学と環境教育総集編 科学と環境教育の関わりを定義する
 - ⑬オオバコずもうで勝つ方法！理学系研究室の自然体験
 - ⑭川遊びのルールを広めよう
 - ⑮日本型、日本的を考える ～日本の自然観という視点～
 - ⑯地球環境カードゲーム マイアースを遊び尽くす
 - ⑰障害者と共につむぐ環境教育の企画をつくる！
 - ⑱森づくりのための戦略会議 ～行政・企業・NPO の協働～

【早朝 WS】

- ①砂鉄から鉄を作ろう！ 柏崎の製鉄遺跡と自然のかかわり
- ②映画「西の魔女が死んだ」 おばあちゃんのお家ツアー
- ③清里の森で宝物発見
- ④ロシアから渡ってきた鳥と出会いましょう
- ⑤清里ミニガイドツアー

- 環境教育プレゼンテーション
- 今後の戦略会議
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

(社)日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2009(通算 23 回)

- テーマ：「生物多様性」～環境教育の役割～
- 日時：2009 年 11 月 14 日(土)～16 日(月)
- 参加人数：193 人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／経済産業省／林野庁／山梨県／日本環境教育学会
- 全体会
 - ・基調講演「生物多様性」とは何か？ 行政・企業・NGO から
 - ・事例紹介「生物多様性 私はいこう伝える」
 - ・全体ディスカッション

【ワークショップ】

- ①自然体験型環境教育基礎講座
- ②多様な生物の声を聴く～全生命の集いワークショップ～
- ③科学的な視点を活かした環境教育のプログラム作り
- ④企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える
- ⑤社会人大学院生&興味ある人集まれ！Part2
- ⑥風が吹けば桶屋が儲かる 生物多様性ゲームトライアル
- ⑦バーマカルチャーと環境教育
- ⑧幼児～小 2 に伝える生物多様性～生物多様性の形を探る～
- ⑨ビジターセンターを運営側から考え創る方法
- ⑩あなたにとって、生物多様性って何？
- ⑪生物多様性に焦点を当てたプロジェクト・ワイルド体験
- ⑫人間界に多様性は確保されているか
- ⑬日本の森林環境教育と Project Learning Tree
- ⑭どうプログラム化しよう？自然学校の「エネルギー」
- ⑮風が吹けば桶屋が儲かる 生物多様性ゲームトライアル
- ⑯日本的、アジア的自然観を整理し、環境教育に活かす
- ⑰エコとエネをつなぐ環境教育を考える Part2
- ⑱事故防止～注意を促すだけでいいの？実践的予防安全法
- ⑲トラランジョンタウンとは何か？都留での試み

(注) ⑦川遊びを始めよう！～川の安全管理トレーニング～ は、都合により中止

【早朝 WS】

- ①生物多様性を映像で感じよう ～いっしょに生きる道～
- ②映画「西の魔女が死んだ」 おばあちゃんのお家ツアー
- ③ゼロからの火おこし術

- 環境教育プレゼンテーション
- 当日募集ワークショップ
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

※2010 年 6 月 公益社団法人への移行認定を取得、
公益社団法人日本環境教育フォーラムへ。

(公社)日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2010(通算 24 回)

- テーマ：「いのちをつなぐ環境教育」
- 日時：2010 年 11 月 13 日(土)～15 日(月)
- 参加人数：177 人
- 主催：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／経済産業省／林野庁／山梨県／日本環境教育学会

■全体会

- ・基調講演「生物多様性条約第 10 回締約国会議の結果」
- ・提案「生物多様性保全に果たす ESD の取組について」
- ・提案「What is CEPA?」
- ・取組紹介「環境省における ESD の取組について」
- ・全体ディスカッション

【ワークショップ】

- ①自然体験型環境教育基礎講座 ※
- ②日本の自然観から考える環境教育
- ③農的暮らしの学校
- ④自然感を耕す：人は心を、畑は土を、森はデザイン感を
- ⑤生物多様性まんだらカードゲーム体験会
- ⑥生物多様性条約の CEPA って何だ？
- ⑦企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える
- ⑧エコとエネをつなぐ環境教育を考える Part3
- ⑨「サステナビリティ」の基本はこれだ！ ※
- ⑩これだけは知っておきたい！生物多様性の基礎知識 ※
- ⑪生物多様性を普及する環境教育を目指して
- ⑫森を考える～木質バイオマスで 100 年先の森づくり～
- ⑬大学生のための食育プログラム
- ⑭命をいただく～ニワトリと生きる～
- ⑮エコロジカル・シンキングゲーム
- ⑯「地球交響曲第 7 番」を見て、みんなで語ろう！
- ⑰イナカとこどもと日本の未来を考える
- ⑱企業の行なう自然体験活動と地域のつながりを考える

※の印は、主催者企画ワークショップ

(注) ⑨海外での環境教育(保全)活動を日本でどう伝えていくかは、都合により中止

【早朝 WS】

- ①バードコールハイク
- ②多様性を感じる観察会
- ③ゼロからの火おこし術
- ④朝飯前の手仕事
- ⑤朝日をあびつつ、ミルクティー飲んでごあいさつ
- ⑥生き方を学ぶ自然観察
- ⑦ノルディックウォークで早朝散歩
- ⑧映画「西の魔女が死んだ」 おばあちゃんのお家ツアー
- ⑨みみをすませば～みんなでつくるいのちのものがたり～

■環境教育プレゼンテーション

- 当日募集ワークショップ
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

(公社)日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2011(通算 25 回)

- テーマ：「これからの日本の復興に環境教育がどういう役割を果たすのか」
- 日時：2011 年 11 月 19 日(土)～21 日(月)
- 参加人数：188 人
- 主催：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／林野庁／経済産業省／山梨県／日本環境教育学会

■全体会 1

- ・パネルディスカッション
- 「これからの日本の復興に環境教育がどういう役割を果たすのか」

【ワークショップ】

- ①自然体験型環境教育基礎講座 ※
- ②企業・NPO・学校連携の環境教育を考える VOL.2
- ③質的データ分析(QDA)という手法を学ぶ
- ④農的暮らしの自然学校
- ⑤森林療法にできること～森林セルフケアの可能性
- ⑥里山応援ネットワークを作ろう！ワークショップ
- ⑦0 から仕事を作る～体験からチームを作る～
- ⑧『ワールドカフェ～自分発！未来をかける価値観考～』
- ⑨修験道×環境教育～音色と歩き、体で精神性を感じる～
- ⑩震災救援組織(RQ 市民災害救援センター)の作り方 ※
- ⑪ESD×CSR：サステナビリティ教育指針を体感！ ※
- ⑫やったらできた！エネルギー系企業と弱小 NPO のコラボ
- ⑬環境と文化・歴史・科学 etc.の複合…「旧暦」入門
- ⑭自然感を耕す 自分と里地里山里水が元気になるワーク
- ⑮生物多様性まんだらカードゲーム 今年は小学生版
- ⑯PLT, WILD, WET の日本での可能性を考えよう
- ⑰日本的、アジア的自然観を整理し、環境教育に活かす
- ⑱原発と環境教育～思ったことを話すことからはじめよう～
- ⑲狩猟×環境教育～森と野生動物と人のつきあい方～

※の印は主催者企画ワークショップ

【早朝 WS】

- ①ゼロから始める火起こし術
- ②森林療法のプログラム体験～樹林気功と運動療法
- ③冬鳥と出会って、いのちを感じる
- ④キープ協会「アニマルバスウェイ」見学ツアー

- 環境教育プレゼンテーション
- 当日募集ワークショップ
- 人と組織の紹介処

【(公社)日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2012(通算 26 回)】

- テーマ：
「アジアの一員として、日本が今できること
～think global actlocal:『リオ+20』の年に考える～」
- 日時：2012年11月17日(土)～19日(月)
- 参加人数：177人
- 主催：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：公益財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／林野庁／山梨県／日本環境教育学会
- 全体会
「アジアの一員として、日本が今できること
～think global actlocal:『リオ+20』の年に考える～」
 - ・基調講演「リオ+20の概要と、NGOの成果と課題」
 - ・パネルディスカッション

「これからの日本の復興に環境教育がどういう役割を果たすのか」

【ワークショップ】

- ①自然体験型環境教育入門講座
- ②自然学校人事担当養成講座～ほしい人材を育てよう～
- ③実施無し
- ④ブーさんの森をデザインしよう！
- ⑤考えよう！伝えよう！森の”いのち”の知恵と力
- ⑥食から考える価値と暮らし
- ⑦ねん土をつかって、超ミニアースオープンをつくろう！
- ⑧農村と若者～そと者、若者による農山村の活性化～
- ⑨一次産業と社会貢献事業～金の切れ目が本気のはじまり
- ⑩「住み開き」を考えよう～身近に環境教育の場をつくる～
- ⑪「都市と自然の融合～両方見て、初めて見える環境教育！～」
- ⑫木質バイオマスを首相官邸へ～さらなる普及をめざして～①
- ⑬地域に根ざすということについて PBE への招待
- ⑭田舎で生きる！ライフモデル作りワークショップ
- ⑮バタゴニアから学ぶ！持続可能な働き方と歩み方
- ⑯環境教育×植物療法～自然の恵みをヒトの力に～
- ⑰都市型環境教育 小学生向け紫外線プログラム体験
- ⑱文学から見た農的暮らしの可能性
- ⑲理想のシゴト？自然学校職員の本音と未来像
- ⑳身近な環境の総合的“明察”…内なる「マイ暦」を作ろう！
- ㉑農が X を助け、X が農を助ける～半農半 NPO でいこう～
- ㉒エコとエネのつながりを考えるカードゲームワークショップ
- ㉓森で教える国語・算数・理科・社会をつくっちゃおう！
- ㉔木質バイオマスを首相官邸へ～さらなる普及へ向けて～②

【早朝 WS】

- ①科学と環境教育プログラム「静岡のなりたち」
- ②みどりとともにだに！泥んこ遊び de 苦玉作り
- ③キープ協会「アニマルバスウェイ」見学ツアー

■環境教育プレゼンテーション

■当日募集ワークショップ

■人と組織の紹介処

【(公社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2013(通算 27 回)】

- 日時：2013年11月16日(土)～18日(月)
- 参加人数：204人
- 主催：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：公益財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／経済産業省／林野庁／山梨県／日本環境教育学会
- 全体会
 - ・キーノートスピーチ
 - ・ワールドカフェ方式ディスカッション
 - ・「環境教育に関わる諸団体から最新のメッセージを聞く」

【ワークショップ】

- ①自分の仕事を創る技術～IPの新しい可能性を考える～
- ②地域に根ざした環境教育 Place-Based-Education
- ③モミでご飯をたこう！～空き缶で「ミニかまど」づくり～
- ④宇宙船地球号体感インプリ：20世紀天文少年の誘い
- ⑤環境教育をカードゲームで考えてみよう～エネルギー編
- ⑥「原発事故のはなし3」デモとディスカッション
- ⑦質的データ分析(QDA)を体験してみよう
- ⑧企業と NGO の幸せな関係をながく続ける秘訣
- ⑨楽器を使ったプレゼンテーションを考えよう
- ⑩知っておきたい基礎知識～命・自然・地球・宇宙～
- ⑪日常の現場や暮らしに持ち帰る「運営と振り返り」
- ⑫持続可能な地域のための必要なくみを考えよう
- ⑬継承したい日本の自然観～自然体という生き方～
- ⑭事例から学ぶ ESD(持続発展教育)の基本と実践
- ⑮ゲームで生態系を学ぼう！
- ⑯ウィルダネスファーストエイド～仲間を守るその技術～
- ⑰パフォーマンス評価の世界の潮流
- ⑱15年のノウハウ伝授！身近な素材でプログラムづくり
- ⑲小学校で環境教育やりたい人 集まれ！
- ⑳伝える技術 KP 法(紙芝居プレゼンテーション法)

【早朝 WS】

- ①アイソン慧星いつ観るか…清里、澄んだ空…今でしょ！
- ②ロシアからの旅人に会おう
- ③清里トレラン

【特別企画】

- ・アクアマリンふくしま移動水族館

【自主企画】

- ・プレゼンテーションで世界を変えよう！～TEDの世界～
- ・野外フェスは環境教育のツールになりえるか！？
- ・スマホ、テレビゲームの年齢制限でも考えてみよう
- ・JEEF 理事バンド(バンド演奏)

■10分プレゼンテーション

■当日募集ワークショップ

■人と組織の紹介処

【(公社)日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2014(通算 28 回)】

- テーマ：「ESD の 10 年後の環境教育」
- 日時：2014年11月15日(土)～17日(月)
- 参加人数：186人
- 主催：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：公益財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／林野庁／山梨県／日本環境教育学会
- 全体会
 - ・キーノートスピーチ
 - ・基調報告 テーマ【ESD ユネスコ世界会議を終えて】
 - ・ワールドカフェ方式ディスカッション 【私と ESD】

【ワークショップ】

- ①自然の中で遊ぶゲーム
- ②再び、地域に根ざした環境教育(PBE)について
- ③企業のESDのあり姿/あるべき姿を考えよう
- ④「協働」による里山再生の取り組み～〇〇×〇〇～
- ⑤エネルギー大臣になろう～ゲームで考える環境教育～
- ⑥ウィルダネスファーストエイド～仲間を守るその技術
- ⑦楽器を使ってプレゼンテーションしよう
- ⑧語ろう！考えよう！「企業のESD宣言」
- ⑨電子絵本を活用したESDプログラムを考える
- ⑩国連の新目標(SDGs)は環境教育普及につながる？
- ⑪体感、出航！宇宙船地球丸「苦手は天文」ぶっ飛ばせ
- ⑫「自然学校と林業」環境教育は暮らし生業に直結せよ！
- ⑬イノベーション創発型ワークショップのデザインを学ぶ
- ⑭清泉寮で自然音楽野外フェスティバルをつくる
- ⑮教育と刃物～ナイフを使う喜びを子どもたちに！
- ⑯シニア自然大学を作ろう
- ⑰自己肯定感を育むESD～これからの学びへの提案～
- ⑱GEMSの新しい使い方～森の中で 図書館の片隅で～
- ⑲KP法(紙芝居プレゼンテーション法)の工夫共有ワークショップ
- ⑳小学校で環境教育をやろう！Part II

【早朝 WS】

- ①朝の楽しい修行：ヨガと勤行
- ②環境教育と持続可能な開発の日米比較研究中間報告②
- ③エンカウンターグループ「今ここ」
- ④清里朝散歩

■10分プレゼンテーション

■当日募集ワークショップ

■人と組織の紹介処

【(公社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2015(通算 29 回)】

- テーマ：「地域をつくる環境教育」
- 日時：2015年11月14日(土)～16日(月)
- 参加人数：174人
- 主催事務局：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 現地開催事務局：公益財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／林野庁／山梨県／日本環境教育学会
- 特別協力：環境省グッドライフアワード
- 全体会
 - ・キーノートスピーチ「農的生活学校の学び方」
 - ・ワールドカフェ方式ディスカッション「地域をつなぐ環境教育」
 - ・「世代を超えて一緒に〇〇おう！」

【ワークショップ】

- ①広範囲に拡散した外来種の市民による調査と駆除対策
- ②獣害問題は、環境教育の対象になるのか。
- ③エネルギー大臣になろう！～ゲームで考える環境教育～
- ④ご当地 GEMS～地域に根差したアクティブ・ラーニング～
- ⑤自然学校の 30 年を振り返りこれからの 20 年を考える
- ⑥環境教育の基礎…自然とは？命とは？
- ⑦「PBE：地域に根ざした学び」を考える
- ⑧「若者が地域で生きる・暮らす」を考える 3 時間
- ⑨里山ってなんだらう～その意味、価値を考える～
- ⑩野生生物と共生する環境地域づくりの進め方
- ⑪持続可能な未来のための科学技術とのつきあい方
- ⑫サステイナブル・ツーリズム国際基準を自然学校に！
- ⑬体感、出航！宇宙船地球丸。「天文は苦手」吹っ飛ばせ
- ⑭探そう磨こう！環境教育の魅力を伝えるコトバ
- ⑮野外フェスに環境教育を広げる『NATCU FES』
- ⑯地域が蘇る“森林資源を循環させる経済”を考える
- ⑰廃校利用の自然学校の経営
- ⑱ビギナーのための自然体験型環境教育プログラム

【早朝 WS】

- ①朝の楽しい修行：ヨガと瞑想と歌
- ②手づくりのもみ殻コンロ、ペール缶めくくどの実演！
- ③ロシアからの旅人と再会しよう～冬鳥との出会いを求めて～
- ④清里朝散歩

■10分プレゼンテーション

■当日募集ワークショップ

■人と組織の紹介処

【(公社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2016(通算 30 回)】

- テーマ：「環境教育の未来を考える！あなたの次の一歩は？」
- 日時：2016年11月5日(土)～7日(月)
- 参加人数：196人
- 主催事務局：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 現地開催事務局：公益財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／林野庁／山梨県／日本環境教育学会
- 全体会
 - ・スライドショー「これまでの環境教育をふりかえる」
 - ・パネルディスカッション「日中韓スウェーデンの環境教育比較研究」

・全員参加型ディスカッション

【ワークショップ】

- ①持続可能な社会づくり、企業の役割とは
- ②持続可能な暮らしの日常を体験する「いつもの暮らし」
- ③『エディブル・スクールヤード』をはじめよう！
- ④環境教育業界×私たち、若手の関わり方
- ⑤祝 30 周年☆清里ミーティングにまつわるコピーを作る
- ⑥自然をフィールドとした父親参加型のわんぱく子育て
- ⑦エネルギー大臣になろうワークショップ
- ⑧清里ミーティング「30+30」
- ⑨森の中でサイエンス～動物たちの生きる知恵
- ⑩“環境”＝“地球”を感じてみよう！天文のイロハ for 環境教育
- ⑪CEPA って何の略？地域をつくる湿地教育を考える
- ⑫森が薫る燻製づくり
- ⑬一流を学ぶ・・・第一印象と名刺交換
- ⑭「水の足跡」ースペース・ウォークを使ってー
- ⑮環境・CSR 活動評価チェックリストを使ってみよう
- ⑯海の森からの贈り物～海藻おしば～
- ⑰告知・広報に活かす” 伝わる”、” 伝える” 文章講座
- ⑱環境教育と家族
- ⑲アクティビティを再生する
- ⑳野外での事故に備えよう！「野外・災害救急法」の体験
- ㉑ いま「公害教育」を考える
- ㉒ 「いつもの暮らし」を環境教育プログラムに！
- ㉓ 「自然から学ぶ場と人の全国フォーラム」中間検討会
- ㉔ SDGs でつなげる地域と活動ワークショップ
- ㉕ 銀粘土で作る リーフモチーフの純銀アクセサリー
- ㉖ 幻想は捨てよう！NPO と行政のミズを埋める 8 0 分
- ㉗ 火を囲み、みんなで作る「居場所」づくり
- ㉘ マジックで環境教育に活用する
- ㉙ 抜けよう！特定外来生物駆除活動の輪！
- ㉚ 持続可能な未来のための科学技術とのつきあい方 2

【早朝ワークショップ】

- ① ヨーガと瞑想
- ② 甲虫の玉虫でアクセサリーを制作してみよう
- ③ 冬鳥と出会い、地球を感じよう
- ④ 清里朝散歩

■10 分プレゼンテーション

■ポスターセッション

■当日募集ワークショップ

■人と組織の紹介処

清里ミーティング 2017 報告書

発行者：公益社団法人日本環境教育フォーラム（JEEF）

〒116-0013

東京都荒川区西日暮里 5-38-5 日能研ビル 1 階

TEL：03-5834-2897 FAX：03-5834-2898

URL：<http://www.jeef.or.jp/>